
COBALT-SERIES
聖石の使徒
前田珠子
其は水に遊ぶ者Ⅱ
集英社

COBALT-SERIES

聖石の使徒

其(そ)は水に遊ぶ者Ⅱ

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

聖石の使徒

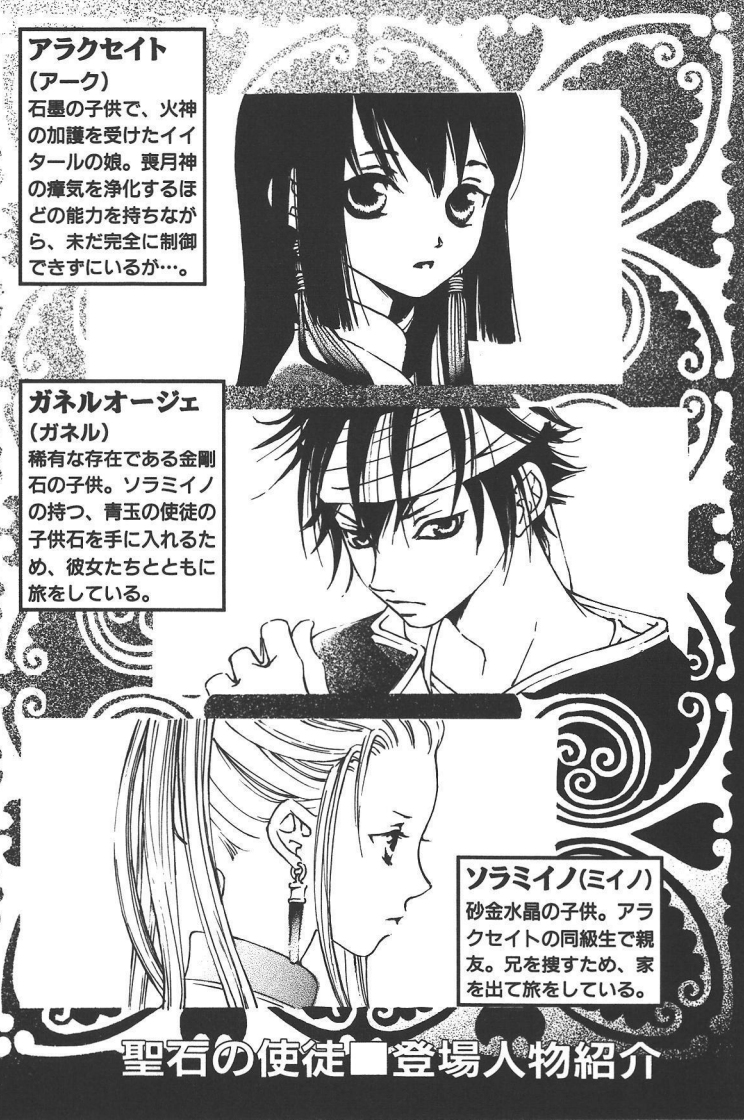
其(そ)は水に遊ぶ者II

前田珠子

集英社

目　次

聖石の使徒
其(そ)は水に遊ぶ者Ⅱ
其(そ)は水に遊ぶ者Ⅱ……7
あとがき……177

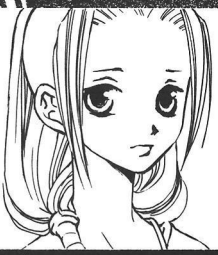

アラクセイト
(アーク)
石墨の子供で、火神の加護を受けたイイタールの娘。喪月神の瘴気を浄化するほどの能力を持ちながら、未だ完全に制御できずにいるが…。
ガネルオージェ
(ガネル)
稀有な存在である金剛石の子供。ソラミイノの持つ、青玉の使徒の子供石を手に入れるため、彼女たちとともに旅をしている。
ソラミイノ(ミイノ)
砂金水晶の子供。アラクセイトの同級生で親友。兄を捜すため、家を出て旅をしている。
聖石の使徒■登場人物紹介



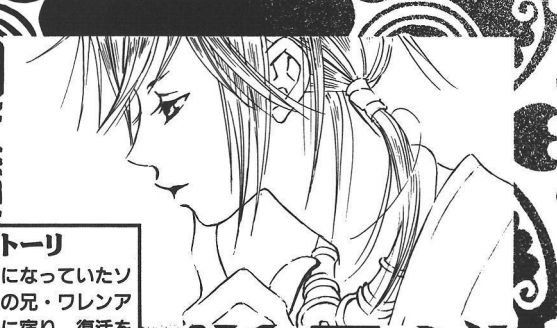
ファーリィン
（ファー）
水神を名付けの親に持つ、カンラタールの息子。水神の神子として翠泉のほとりに住まうが…。



ヴァディリン
（ヴァディ）
ファーリィンの弟。兄を解放しようとして、翠濫を追放されていたが…。



ヴィクティーン
（ヴィーク）
ファーリィンの幼なじみ。聖域である翠泉に立ち入ることを許されている。



サラムトーリ
行方不明になっていたソラミイノの兄・ワレンアイノの身に宿り、復活を遂げた喪月神。

イラスト／山本鳥尾

其(そ)は水に遊ぶ者II



6

純粋な月光のみに満たされた空間で、銀髪の少年が気持ちよさそうに寝そべっていた。
その肌は陽光を一度も浴びたことがないのではないかと思えるほどに白く、その双眸は髪と同じく……否、周囲を満たす月光に染まったかのような銀だった。
細く伸びやかな四肢は、しかしまだ成長期ゆえの不安定さをたたえている。
そう……十五、六といったところか。
月光を全身に浴びながら、少年は、なにが可笑しいのか、くすくすと笑っている。
さも愉快でならないとでも言いたげに。
「人間とは、本当になんと面白い生き物なのか……」
涼やかな声で、彼はつぶやく。
「万華鏡のように見る間に姿を変え、決して同じままには留まれない……たとえようもなく美

しいかと思えば、次の瞬間には目を背けたくなるほどの醜悪さを披露する」

そうして生み出される心地よい『気』は、彼を癒やし、力を与えてくれる。

バルヴァローズという世界が、真実美しいと感じるのは、それを目の当たりにするときだ。

醜悪なものがあってこそ、美しいものはさらに輝いて見える。世界中が美しいもののみで溢れていたなら、誰も真の美しさなどわかりはしないだろう。

比較するものあってこその『美』と『醜』だ。

善と悪にしてもおなじこと――。

「母上……」

歌うように、少年はささやいた。

彼の――否、彼に宿る意識の主の母親は、永の眠りのなかにある。

「こうなってみると、わたしの……我々の思いや行為も、この世の構築に役立ったのだとは思いませんか？」

答えは返らない。

そのことを気にする風もなく、少年はそっと目を閉じる。

心地よい空間と興味深い見せ物――けれど、まだ満足できるほどのものではない。

望みをかなえるには、まだまだ力が足りない。
楽しい見せ物には、まだまだ波瀾が足りない。
「さて、どうしようか……」
つぶやきながら、少年は微笑んだ。
舞台を整えるための駒は、無数にある。
強い駒も、弱い駒も——そして使い方次第で強くも弱くもなる駒も。
「とりあえずは……」
ここではない、遠くを見つめる彼の銀の双眸に、そのとき映っていたのは、かつて彼の甥に愛されながら、奢りによってその寵を失った小さな街の風景だった。
早晩、滅ぶしかない小さな街。
なのにそこに住む人間たちは、そのことを決して認めようとはしない。
しがみつき、足掻き、以前の豊かさを取り戻そうとしている。
愚かというべきか、したたかだと感心するべきか。
「どんな踊りを見せてくれるかな……？」
悪戯を企む子供の笑顔で、少年はつぶやく。

ささやきひとつで人間ひとりの運命など、たやすく歪めるその声で。
かつて妬心で母神を永の眠りに誘い、そしていま、バルヴァローズに混乱と騒乱を巻き散らそうとしている者。
其は失われし月神……喪月神の片割れ。
サラムトーリ。
人間のなかに宿る月神は、未来に思いを馳せ、嬉しそうに目を細めた。
そのときは……もう、遠くはない。

火事を知らせる鐘の音に、ヴィクティーンはさっと顔色を変えた。
季節は夏にさしかかっている。本来ならこの季節に、これほどに火事が起こることはまずないはずなのだが、今年はどうにも様子がおかしい。
背後で、身を起こす気配を感じる。
ファーリィン――この翠濫の守り主として崇め奉られている水神の神子たる青年だった。

「ファー！」

必死な顔で、彼女は青年の長衣のすそを摑んだ。

「やめて、ファー！　あなたがこれ以上無理をすることは……」

ないのだと――言い切るより先に、幼なじみの青年は「だめだよ」と告げた。

「ほかでもないヴィークが、それを口にしてはいけないよ」

と――。

彼女の身を案じての、優しい言葉に、しかし彼女はかぶりをふった。

「だって、ファー！　火事の度にみな、あなたの力にすがってばかりで……以前なら自力で消していたような規模のものまで……あなただって、無条件にカンラタールの子供たちの力を借りられるわけではないというのに……」

そう、それがあるからヴィクティーンは不安でならないのだ。

カンラタールの息子だということで、周囲は自在に、なんの負担もなく彼が水霊を操れるものだと信じている。

とんでもない誤解だというのに！

カンラタールの加護を願うための祭儀の後、ファーリィンがどれほど疲労し、衰弱している

か、ヴィクティーンは知っていた。いまとなっては、この街で、そのことを知っているのは、彼女ひとりとなってしまった。

だからこそ、彼のことが心配で……だからこそ、知らぬうちに彼に負担をかけつづける者たちが憎らしい。

目下、一番腹立たしく思う相手は、最初イーオダールの息子だと勘違いしたあの黒髪の青年だった。

もしあの火事のとき、彼がイーオダールの子供たちの力を用い、ファーリィンを呼びつけたりしなかったら……そう思うと、あの三人組を見つけたことさえ厭わしくなってしまう。

頭ではわかっているのだ。

彼を責めるのは不当である、と。

あのとき、彼が手を拱いていたら、建物のなかに取り残されていた少女は確実に命を落としていただろうし、炎はどこまで広がっていたかもしれない。どれほどの被害となったかもわからないのだ。

それでも――と、ヴィクティーンは思ってしまうのだ。

あの一件さえなかったら、人々がこうも安易にファーリィンの力に縋ることはなかったろう

に、と。

そんな彼女の葛藤を知ってか知らずか、幼なじみの青年は、穏やかな笑みをたたえ、「大丈夫だよ」とささやいた。

そして、彼は迎えの者たちが待つ翠泉の結界の外れへと向かうのだ。

(そうやって、またあなたは身を削るのだわ……)

この街のために——。

翠濫は、ヴィクティーンにとっても生まれ育った故郷だ。

愛していないはずがない。大切に思っていないわけがない。

それでも街の者たちの振る舞いを見るたびに、歯がゆく、悔しく思ってしまうのだ。

(彼ひとりに犠牲を強いて……)

そうしてもたらされる恵みを、さも当然と言わんばかりに享受して——一向に恥じることを知らぬ街の者たち。

「大嫌い」

つぶやいて、ヴィクティーンは自らを抱きしめた。

けれど、一番嫌いなのは……。

（なにもできない……わたしひとりでは、なにも……）

ファーリィンの負担を訴え、街のみなを説得することも、彼をこの檻から解放することも……二年前の騒ぎにおいて、街の有力者たちの言う『犯罪者』の側に加担してしまった身とあっては。

（わたしは、わたしが、一番嫌い……）

そんな思いを抱えこみながら、それでも彼女はあきらめない。

どうしても取り戻したい、かけがえのない時間が、彼女のなかには刻まれていたのだ。

あきらめられるはずがなかった。

アラクセイトの熱は、一向に下がらなかった。

喉の痛みや鼻の不調を訴えるわけでもなければ、変わり種の風邪に見られる胃腸の障害も見られない。

どう考えても、これは風邪ではない。

薄々そうだろうとは思ってはいたものの、長期化しそうな成り行きに、ソラミイノは舌打ちを禁じ得なかった。

この街は変だと、あの紫紺の髪の少女は熱を出した当初から言っていた。その言葉を信用しなかったわけではなかったが、主な原因は蓄積された疲労だろう——ならば、ゆっくりと安静にさせて、体力の回復をはかったほうがいい……と判断したのが悔やまれる。

いつまで経っても、アラクセイトの熱は下がらない。

一応の救いとしては、それでも熱は彼女の食欲や、消化器官の働きを阻害するほどのものではないというあたりだが、この状況がいつまでもつづけば、早晩その手の問題は生じてくるに違いないのだ。

「まいったわ」

実に悔しそうに爪を噛みながら、砂金水晶を抱いて生まれてきた、銀髪の少女がうなった。

「節を曲げてでも、三十六計を決めこむべきだったかしら……？」

異論を唱えたのは、黒髪の青年だった。

「いや？　カンラタールの子供たちがああまで警戒してた以上、そう簡単にはいかなかったろうよ。あのガキの言ってた通り、確かにこの街はどっか変だ」

「あなたに言われるまでもなくわかってるわよ」

かちんときた、と顔に書いて、ソラミイノは応じた。

「だからこそ、言ってるんじゃないの。この街でなにが進行してるかはわからないけど、そんなもの放っておけばよかった……って……！」

政治というものは、俗界にのみ存在するものではない。

聖界と呼ばれる神殿内部にあっても、構成するのが人間である以上、より強固な立場を求め熾烈な争いを繰り広げる者は少なくない。

そういった現実を、ソラミイノは幼いころから飽きるほどに見つめてきた。

だからこそ、彼女はたやすく夢を見たりしない。

少々の才能など、いくらでも演出で補えるものでしかないことを、誰よりも知っているがゆえのことだ。

同時に、だからこそ、本当にかけがえがないと思える存在のためならば、すべてを賭けることも惜しまない。

アラクセイトは演出などで仕立て上げられる器ではないのだ。

忘れることなどできるはずがない――あの、奇跡としか思えぬ瞬間のこと……。

水気、木気、金気、土気を司る色彩の金剛石を従えるかのように宙に散らせ、我が身には、生まれついての火神の加護を纏わせて、絶体絶命と思われた危地から見事に生還した彼女。

あれをおいて、ほかになにを奇跡と呼べばいいのか、と思った。

なぜなら彼女が生還したのは、ただの瘴気が原因となった災厄ではなく、この世――バルヴァローズの存続までも危うくする可能性を持つもの――そう、喪月神と呼ばれるものが直に関わった事件だったからである。

あれほどの奇跡を目の当たりにして、心動かされない人間がいるだろうか。

あの刹那、ソラミイノは心を決めたのだ、この奇跡の化身を守ろう、と。なぜ『この奇跡の化身について行こう』と思わなかったかといえば、理由はあまりにも単純である。

アラクセイトという少女は、これ以上はないという奇跡の化身のくせに、とことん迂闊でドジで墓穴掘りを大の得意にしていたからだ。

あまりにも内情を知りすぎている相手を――しかも好ましからぬ点が多い相手を、崇め奉ることは難しい。もっとも、アラクセイト自身、そうした扱いを受けることを喜ぶとは思えないから問題はないと言えたが。

「ここに落ちたのって、あなたの単純なミスか、あるいは事故かって思ってたんだけど、もし

かしたら、裏があったのかもしれないわね」

かなり失礼なことをサラリと口にして、ソラミイノは考えこんだ。

疑いだせばきりがない。それだけの事情と背景を、彼ら三人は抱えこんでいる。

アスカニーリ神殿内部において、相当な権力を握っている一族の出身であるだけでも、相当に面倒だというのに、長らく行方しれずになっていた兄が、こともあろうに喪月神の憑巫にされてしまったソラミイノの事情は深刻である。

さらには、現在唯一の金剛石の子供であるガネルオージェ。

さらに、さらに、火神イイタールの娘とはいいながら、本来石墨の子供にすぎないはずの身でありながら、危地に立たされた場合限定とはいえ、色とりどりの金剛石を生み出す異能者——アラクセイト。

どれひとつとっても、深刻でない裏事情がないという、困り果てた状況なのだ。

「わたしひとりでも充分すぎるぐらい厄介なのに、なんで連れが揃いも揃って、こんなに面倒背負いこんでいるのかしら……」

とてつもなく身勝手なソラミイノのつぶやきは、しかし限りなく彼女の本音に近いものだった。

ちなみに、非難の意を、向ける相手は親友ではない、もうひとりの連れに限定されている。
そのことを悟ってか、ガネルオージェが顔をしかめた。
「お前な……」
返されたのは無言の眼差(まなざ)し。
しかし、どんな言葉より雄弁に、その緑の双眸は語っていた。
『なにか、文句でも？』
と――。
ガネルオージェは決して愚かな青年ではなかったから、静かにかぶりをふることを選んだ。
「いや……なんでもない」
よろしいとばかりに、銀髪の少女はうなずいた。

7

引かぬ熱に苦しまされながら、アラクセイトは夢を見ていた。
緩やかに、水が流れていく。
川だろうか——それとも、泉における水流か。
気泡と戯れるようにして、カンラタールの子供たちが遊んでいる。
その中心に、ひとりの子供を抱きしめたままで。
まどろむ……あるいは安らんでいるのなら、気に留めたりはしなかったと思う。
だが、子供は、苦しそうに見えた。
苦しんでいるようにしか見えなかったのだ。
カンラタールの子供たちは、そんな子供を気づかっているように見えた。
大事に思っている子供が泣き止まない様子に、途方に暮れ、それでもなんとか慰めようと心

を砕いているように思えた。

アラクセイトにしても、なんだか放っておけないような気になっていた。

子供は、本当に——見ているだけで胸がしめつけられるような顔で、声で、泣いていたのだ。

慰めたいという、明確な意図があったわけではなかった。彼女自身、きつかったし苦しかったし、そうした感覚に疲れていた。

けれど、それでも——アラクセイトはその子供を放っておくことができなかった。

それほどに、痛い涙だったのだ。

その子を慰めてあげたくて、抱きしめてあげたくて、近づこうとした彼女はかすかに顔をしかめた。

体が重く感じられて、思うように手足を動かせなかったのだ。

(せっかく夢なんだから、羽のように軽かったらよかったのに……それとも、やっぱり体の不調は心にも影響してしまうものなのかしらん?)

と、そんなことを思った彼女は、もうひとつの可能性に気がついた。

子供を守っているのは、カンラタールの子供たち——水霊だ。

イイタールの娘である自分とは、はっきり言って、相性は最悪だったりする。
（うーん？）
と思わず、彼女は考えこんでしまった。
（許可、もらわないとダメ、かな……？）
だが、それはどちらに対してだろう？
子供自身か、その子を守っているカンラタールの子供たちか……。
（でも、まあ……）
と、すぐに彼女は意識を切り換えた。
慰めたいのはあくまであの、泣いている子供なのだ、と。なぜ泣いているのか、なにが悲しいのか、聞き出さなければ慰めようもない。
だとしたら、優先すべきは——決まっている。
（近づいたとたん、カンラタールの子供たちに攻撃されるのも遠慮したいから、ここはやっぱり、あの子との意志の疎通から始めるべき、だよね）
ぽよよんでぱややんで、権謀術数やかけひきのたぐいに、とことん暗い少女が選んだ方策といえば……直球勝負だったりした。

「もしもしー」

無謀と言うか、大胆と言うか、彼女は泣いている子供に向かって、声をかけたのである。

「ねえ、そこの子ー！　ちょっとー」

大声で呼びかける。

夢のなかでもアラクセイトはアラクセイト以外の何者でもなかった。

そして、そんな彼女の呼びかけに、子供は頭をあげたのである。

黒と見紛う暗褐色の髪、やはり黒にも見える暗灰色の双眸――。

水神の子供たちの愛情と加護を一身に受けるにふさわしい色彩を帯びたその子供は、まっすぐにアラクセイトを見返し、こう問いかけてきた。

「お姉さんは、誰？」

またしても火事が起こったと、翠濫では大騒ぎだった。

「ほんっと、まずいわね」

ぼやきながら、ソラミイノは遠い目をしてつぶやいた。
彼女の心配事は、連れの少女にある。
この翠濫における騒ぎに、実のところ、アラクセイトはかけらとても関わってはいない。
けれど、彼女が『イイタールの娘』であることは否定しようのない事実であり、そうである以上、どうしたって厄介事はその身に降りかかってくるのだ。
「陰謀ね」
干した薬草を区分けしながら、そうつぶやいたのはソラミイノである。
「恐らくな」
と答えるガネルオージェは、乳鉢で砕いた木の皮を細かく磨り潰している。
ふたりは現在、翠濫の街の施療院にいた。
先日以来増えつづける火事のため、火傷や怪我を負った者たちのために、手の足らなくなった薬師を手伝うという名目で、彼らはその薬草保存庫に陣取り、密談に利用しているのである。
なぜ、世話になっている領主の屋敷でなく施療院を選んだのか、と言えば、どこにどんな耳があるかしれないということと、やはり未婚の男女がそう度々ふたりきりになることは、外聞

がよろしくないからだった。

聖石の子供のほとんどは、幼少時神殿に預けられ、そこである程度の薬草学を学ぶことは広く知られており、薬師の指示通りに薬湯や軟膏を作るため、ふたりが一緒にいても、不審がられることもない。

実際、作業しつつの会話であるから、疑われることなくうまくいっている。薬草や精油の扱いは難しいため、専門の知識を持つ者しか出入りを許されない場所であることも都合がよかった。

「ええっと……消毒ずみの粘土にラワンデルの精油を……と、うん、これでいいわね」

近づいてくる足音を耳にしたソラミイノが、咄嗟に話題を変え、言葉通り出来上がった火傷用の湿布材——実はとっくに作っておいたものだが——を持ち上げる。

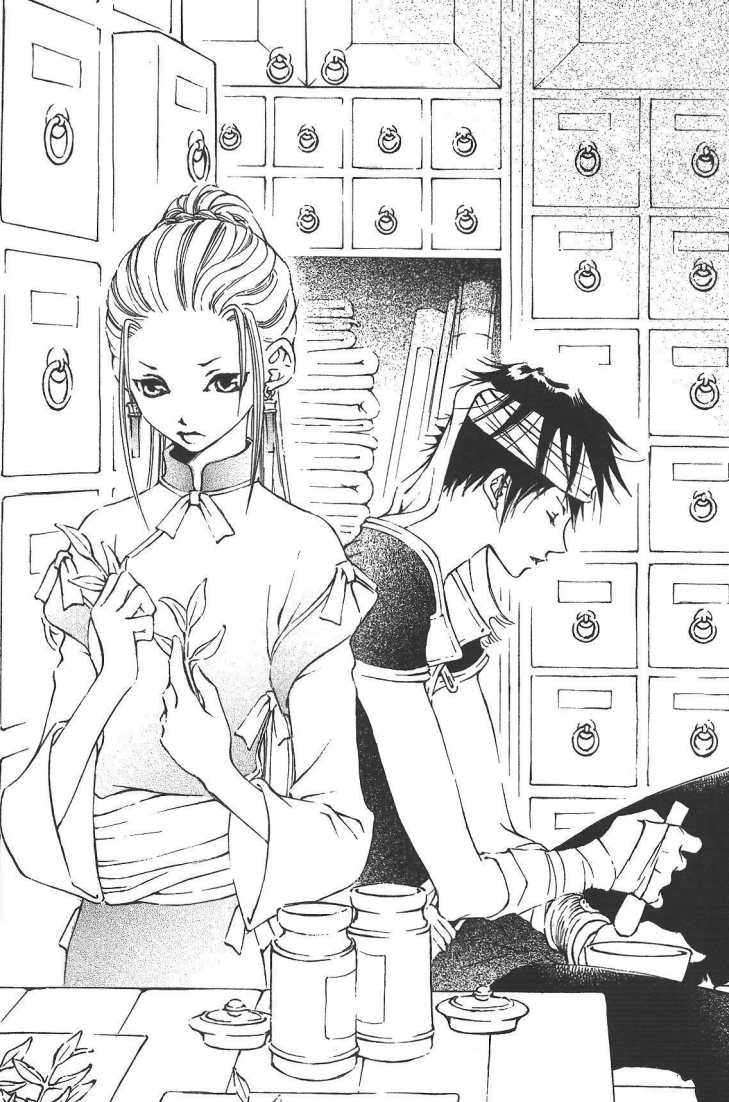
そうして、薬師の手伝いの者に渡すと、ふう、と息をついた。

緑の双眸には、物思わしげな光が宿っている。

「……いったい、誰が……」

つぶやく彼女に、残酷なまでの率直さでガネルオージェが応じた。

「おまえにわからないはずはないと思うが……？」



なにを指しての言葉であるのか――あまりにもはっきりしたその声に、ソラミイノは思わずかぶりをふっていた。

「そう、とは……限らないわ」

あの子を手に入れようとする者の企(たくら)みかもしれないのだし。

つぶやく声には力がなかった。

認めたくないだけなのだと、彼女自身が知っていた。

いまこの世界で、アラクセイトを誰より危険視し、邪魔に思っているのは何者なのか――。

言われるまでもなくわかっている。

浄化の炎を自在に操り、五属すべてと通ずる石を生み出すことのできる彼女――それは、ほとんどの神の力を借り得るということだ。

ワレンアイノの身を借りて復活を果たした喪月神(そうげつしん)のひとり、サラムトーリにとって、これほどに目障(めざわ)りな相手がいようか。

だが、そうとは信じたくない。

ワレンアイノはソラミイノにとって、かけがえのない兄なのだから！

「そう思いたいのはわかるがな」

ぼそりと告げてくるガネルオージェの口調に、同情めいたものを感じとった瞬間、彼女は激昂した。

「なにがわかるというの!?」

叫んだ瞬間、我に返り、後悔した。

ソラミイノは覚悟を決めたと自分で思っていた。兄ワレンアイノの肉体を宿に、復活した喪月神のひとり――サラムトーリを相手取り、戦うことを心に決めたと、そう信じていたのに、実のところはまだこんなにも迷っていたのだと、敵対する間柄ではないその証拠をずっと求めていたのだと、いまさらのように思い知らされた。

時は、もはや動かしようがないというのに。

「ごめんなさい……八つ当たりだわ」

自らに非があることを認めた場合、素直にそれを肯んじ、謝罪するのは、ソラミイノの持つ美徳のひとつだった。

「そうね……多分、恐らく、そういうことなのだとは思うわ。この街で、イイタールの娘であること以上に危険なことはないでしょうから……」

誓って言えるが、アラクセイトはこの騒ぎに関わってはいない。

だが、傍目に関わっているように見せかけるのは、ある意味簡単なことなのだ。

彼女たちが訪れて以来、頻発するようになった火事騒ぎ――その最中でもし、アラクセイトがイイタールの娘であることが発覚したら。

それだけで、彼女は告発されてしまうに違いない。逃げようにも、体調を崩したいまの状況では難しい。

カンラタールの子供たちによる妨害だけでも頭の痛い問題であるのだが、そもそも『空を飛んで逃げる』には、圧倒的に体力が不足しているのだ。いまの状態のアラクセイトを連れて、イーオダールの子供たちに助けてもらおうとしたら、ひとの目でもはっきりと認識できる程度の高度の空しか飛行できない。

多数……などという言葉では片づけられない目撃者が現れることは必至――そこに活用法を見いだした者たちが神殿に押し寄せればどうなるか……それが問題なのだ。

誰もが空を飛べるわけではない。

適性というものがあるのだ。

聖石の使徒か、適性を持つ聖石の子供に限られる特技なのだ。

だが、そんなことは人々は知らない。

力ある聖石の子供石さえ手に入れることかなえば、そんな奇跡もたやすく行えると思い込む可能性は大である。

それは……できない。

聖石やその子供石は、あくまで病を癒したり、加護をもたらすものでなければならない。便利に使える道具となり得る事実を明かすわけにはいかなかった。

「なあ」

と、ガネルオージェが声をかけてきた。

「一時的に拘束されることには目を瞑って、神殿に保護を求めるとかはできないのか？」

ワレンアイノを喪月神から自由にする――その目的のため、あえてアスカニーリ神殿から身を遠ざけてきたソラミイノに対する、ある意味それは意地の悪い提案だった。

あくまで兄を守るために親友を危地に放り出すのか、それとも親友のためにかなり不自由な身になることを選ぶのか。

しかし、出会って以来犬猿の仲でありつづけてきた銀髪の少女は、彼のそんな言葉には怯まなかった。

ふん、と鼻を鳴らして彼女は言い切ったのだ。

「ここの神官長がうちの一族寄り、もしくは中立だったら、とっくに試してたわよっっ！」

つまり……そうではない、ということだ。

「豊珠のアスカニーリ神殿随一の権門だと言ってなかったか？」

「最大の派閥ではあるけれど、敵がいないわけじゃないってことよ」

こうしたことを言ったとしても——個人的に、言いたくなどなかったが——きょとんとして終わりになるアラクセイトと違い、ガネルオージェは俗世のからくりに、それなり以上の理解を持つ人物だった。

「敵対勢力ってわけか……」

「そういうこと」

あっさりと答えた後、彼女はさも嘆かわしげにこう洩らした。

「本当……せめてあなたが使徒にでも認定されててくれたらねえ……」

それを楯にさっさと保護を求められたのに——。

言外に告げられる「役立たず」との声に、ガネルオージェが顔をしかめた。

「ひとのこと、さんざんに言いやがるくせに、こんな時だけ利用しようってつもりか!?」

「当然じゃない」

対するソラミイノはあっさりと言い切った。
「立ってる者は親でも使えって言葉、知らないの？　困窮時ならなおさらというものでしょうが。本当に、あなたさえ使徒だったら……」
言いかけたソラミイノの口を閉ざさせたのは、部屋の外から聞こえてくる尋常でない、ひとびとの騒ぐ声だった。
（なにが……？）
起こったというの？
必死に耳をすませる彼女の耳に飛び込んできたのは、どうやらまた、火事が起こったらしいということ。
しかもそれが、領主の屋敷であること、だった。
「そんな……」
ソラミイノは絶句した。
悪いことばかりが降りかかってくるような、そんな気がした。

夢と現の狭間をたゆたう感覚にさらされながら、アラクセイトは自分を狩る者の気配を感じ取っていた。

迫ってくる――恐ろしいモノ。

威嚇ではない。

明らかに自分の命を狙い、迫り来るその気配を、痛いほどに彼女は感じていた。

それ、には、覚えがあった。

ひたひたと近づいてくる。闇のなかに、刃を隠して――それでいて密かに近づきつつあるモノの存在を感じ取る。

(怖い……)

それがなにか、自分は知っていると、アラクセイトは思った。

覚えている……そう、決して忘れることなどできない。

(喪月神の……)

そう、自分を抹殺するために、近づいてくる……この気配。

(怖い……!)

本能的な恐怖はいかんともしがたかった。
それがなんであるのか、アラクセイトにはわかっていた。
かつて数度さらされたこの気配――この圧迫感。
間違えるはずがない。
（喪月神の……！）
近づいてくる。
迫ってくる。
今度こそ、この命を摘み取るために！
ざわり、と闇が動いた。
触れてくる――そう感じた瞬間、彼女は恐怖と嫌悪に支配され、知らず、力を放っていた。
「いやあぁぁぁっ！」
その刹那、彼女の周囲に炎が生まれた。
灼熱の浄化の炎は、彼女に手を伸ばしてきた喪月神の瘴気を燃やし尽くす！
しかし、この後、別の――アラクセイトではない女性の悲鳴が、周囲に響きわたったのである。

「きゃああっっ！」

その声のしたほうを振り向いた彼女は、体調を崩して以来、なんやかやと世話を焼いてくれるようになった屋敷の侍女が、恐怖もあらわな眼差しを、自分に向けていることに気づき、しまった、と思った。

（わたしの馬鹿、馬鹿、馬鹿！　あれだけ力、暴走させるなって、ミイノにもガネルさんにも言われてたってのに……）

油断したのとは少し違う。

塡められたのだ。

とはいえ、そうした感覚はずっと感じ取っていたのだから、自らの迂闊さは言い訳できない。

逃げなければ、と彼女はまず思った。

いくら違うと言い張っても、実際に炎を生み出したところを見られた以上、ここ最近の火事騒ぎの元凶が、自分だとみなされるのはまず間違いないと思えたからだ。

だが、すぐにそれはできない相談であることを自覚した。

微熱とは言い切れない熱のせいで、体力は明らかに下がっていたし……なにより、こんな状

況で力を発揮すれば、十中八九、力は暴走するに違いないのだ。

（ミイノ……ガネルさん、逃げて……どうか……）

侍女の悲鳴に駆けつけてくる、警備の者たちの足音を聞きながら、アラクセイトは必死にそれだけを願っていた――。

8

翠濫領主アナディーンは、私室に自分以外の人物がいることに気づき、さらにはそれがここにいてはならぬはずの者だと認識した瞬間、顔をしかめた。

頭の痛いことばかりがつづくというのが、偽らざる彼の本音だった。

先程も、大層な騒ぎをおさめてきたばかりだ。せめて日を改める程度の気遣いはないのかと、侵入者に対して不平を並べ立てたくなった。

とはいえ、それは不条理な言い分であることはわかっている。いや、この騒ぎがあったからこそ、侵入者は無事にここまで入りこめたのかもしれないということを考えれば、あながち無関係とは言い切れないかもしれないが。

「追放者が、なんの用だ？」

そう、相手は追放された者だった。

それだけの罪を犯した者だった。
だが、いまこの場で捕らえ、戻ってきたその罪を糾弾するわけにはいかない事情を持つ者でもあった。
そのあたりのことを、相手もわかっているのか、その態度はどこまでもふてぶてしい。
「どうやら騒ぎがあったようですね」
空を飛べでもしないかぎり、遙か遠方からここに来れるはずがないから、アナディーンは彼が密かにこの街に立ち戻っていたことを察した。
もっとも、ここのところの火事騒ぎは街中でも噂になっているという話だから、それ以上のことを明かすつもりなどなかったが。
しかし侵入者である青年は、くつくつと喉を鳴らしながら、到底看過できぬことを言い出したのである。
「元凶はどうやら、イイタールの娘だということ……」
ぎくり、とアナディーンの顔が強張った。
「なんのことやら」
声が上擦らぬよう、細心の注意をもって応じた彼は、しかし相手がとうにそれを事実として

認識しているのだと悟り、内心舌打ちした。

「それで、ご領主殿は、その娘をいったいどうなされるおつもりです？」

半ば面白がっているようなその問いかけに、アナディーンは生真面目に――必ずしも本音とは限らない――答えを口にした。

「無論、慎重な詮議をはかった上で――」

と、続けようとする彼の言葉を、相手――ヴァディリンがさえぎった。

「やめたほうがいい」

意外な言葉に、領主はつい聞き返してしまった。

「なんだと!?」

思わず声をあげてしまったアナディーンは、室内に立ちこめる微かな香りに気づけなかった。

それは、人間の警戒心を和らげる香り――無防備とまではいかなくとも、知らずこの香りを聞いた者は、無防備に相手の態度や言葉を受け取るようになる。

このときのアナディーンが、まさにそうした状態だった。

そうと知りつつ――否、知るからこそ、ヴァディリンは唆しの言葉を吹きこんだ。

「その娘はイイタールの娘だという欠点を補って余りある、美質の持ち主だと言っているのですよ」

馬鹿な、とアナディーンはつぶやいた。

この翠濫において、火神の娘であることを相殺する事情など考えられはしない。

その事実を上回るような長所――!?

あり得ない。

はっきりとそう言い切った彼に、追放された罪人はささやきかけた。

「その娘は、自在に色とりどりの水晶を生み出すことができるんですよ」

色彩の豊かさにおいて、水晶に勝るものはないと言われる。

火気を司る紅水晶。水気を司る煙水晶、木気を司る紫水晶、金気を司る透明なそれ、そして土気を司る黄水晶……。

すべての属性に通ずる色彩を持つ石は、目下水晶のみと言われている。

だが、自在にその色彩までも操れる者は使徒でもいない。

「あり得ん」

一言のもとに言い切ったアナディーンの目の前のテーブルに、ヴァディリンは幾粒かの色石

を、こぼすように置いた。

そうして、ひとつひとつに指で触れながら、ささやくように告げる。

「黄水晶……アスカニーリの恵みを請えるもの。煙水晶、カンラタールの恵みを請えるもの。紫水晶、イーオダールの恵みを請えるもの……」

それらはすべて、ひとりの存在が生み出したものなのだと――。

香のせいもあっただろうが、アナディーンはヴァディリンの言葉に魅せられていく。

「彼女さえいれば、翠濫の栄華は約束されたようなものですよ」

アナディーンは悩んだ。

誘惑はあまりにも大きすぎ、しかもこれが詐術かもしれぬという不安を拭いきれぬだけの根拠を彼は持っていた。

そうたやすく信じることはできなかった。

そんな彼の心中を察したのか、ヴァディリンは悠然とこう答えた。

「なら、試して見るといい。あの娘は間違いなく、この翠濫を栄光に導く鍵となる者だよ。神々の恵みを受けた……しかも神殿からは自由な『聖石の子供』がいる以上、この街の繁栄は約束されたものだ……そうだろう?」

半信半疑のまま、アナディーンは『試す』ことに同意した。
欲望とは、かくもたやすく、ひとの心を切り崩すのである……。

翠濫における最高司祭の訪れを受けたとき、アラクセイトはきょとんとしてしまった。
（なんでー!?）
というのがその本音である。
束縛というか、監禁というか……まあ、そういった扱いを受けずにすんだのはよしとして、だ……司祭直々による修行というのは、さすがに考えるものがあったのである。
さんざんっぱら、修行は基本一辺倒でやること――を、くどいほどにソラミイノに言われていたせいもあったかもしれない。
（基本、基本、あくまで基本……）
自身にそう言い聞かせて、修行に励んだ甲斐は、あるいはあったかもしれない。
相手の期待に応える結果は出せなかったとはいえ。

（基本……とにかく、基本が大事）

そう思い、そのことに固執したアラクセイトのために――いや、なに、彼女自身は、あくまで世界に迷惑をかけない程度の力の発現をよしとしていたものだから――翠濫の司祭は相当な努力を強いられた。

挙句に起こったのは、アラクセイトの力の暴発。

部屋の半分を吹き飛ばす爆発を起こした後に、彼女は拗ねた顔でつぶやいた。

「だから、そんな高度なこと、いまのわたしじゃ無理だって言ったのに……」

この瞬間、司祭はそれが、自分の手に余る存在であることを悟った。

では、どうするのか。

別の存在に押しつけるだけである。幸いなことに、この翠濫にはイイタールの娘を預けるに足る、格好の相手がいた。

かくして、アラクセイトの身柄は、『水神の神子』ファーリィンのもとに預けられることとなった。

水は火に克つ――ただ、その真理ゆえに。

「あの大間抜け」

忌ま忌ましげに吐き捨てたのは、その『大間抜け』の親友である少女である。

そばにいる黒髪の青年は口には出さないものの、同感だとばかりに小さくうなずいている。

翠濫の下町――薬師イェルネージェの家に匿われたふたりは、洩れ聞こえてくる情報を耳にするたび、舌打ちを連発していた。

領主の屋敷で火事騒ぎが起こり、その犯人としてアラクセイトが捕縛されたと聞いたとき、ふたりが真っ先に考えたのは身を隠すこと、だった。

アラクセイトを見捨てようとしてのことではない。

一緒に捕まってしまっては、逃げるのが難しくなると冷静に判断したためだ。もし、自分たちが聖石の子供であることを知られてさえいなければ、そうしてもよかったろうが、知られている以上、捕まればそれぞれ別個に、しかも厳重な警備の下に置かれるのは間違いなく、そうした場合脱出が恐ろしく困難になることは火を見るより明らかだったのだ。

それぐらいなら、自由でいたほうがいいに決まっている。

そういうわけで、すぐさま彼らふたりは身を隠すことを選択したわけだが、ここで困ったのはその身の隠し場所だった。

アラクセイトが翠濫にとって天敵にも等しい『放火犯』扱いをされた以上、その仲間であるふたりに好意的な人間を見つけるのはまず不可能に思えたこと、さらには領主館から彼らを手配する動きが出るに違いないことはわかりきっていたからだ。

しかしその心配は杞憂に終わった。

意外にも、薬師イェルネージェが協力を申し出てきたのだ。

半信半疑のふたりに、彼はこう語った。

『翠泉の恵みは、いまや領主の占有物なんだよ』

と――。

だから、彼らを邪魔するのに喜んで手を貸す人間は、実はこの街では珍しくはないのだ、と――。

あっさり信じるには危険なものを感じたふたりを、とりあえず自宅に匿ってから――すぐにも施療院には領主の手の者たちが押しかけてきそうな雰囲気だったから、ふたりとしてもその提案には乗らざるを得なかったのだ――イェルネージェは事情を説明してくれた。

権力者の傲慢と強欲と身勝手――そのすべてを結晶化したかのような、この近年の翠濫の現実というものを。

一通り聞いた後、ソラミイノが口にしたのは。

「最低」

のひとこと。

ガネルオージェと言えば、呆れたように肩をすくめ、

「どいつもこいつも……」

と洩らすのみ。

（ろくでもない）

両者共通の認識を胸に抱え、ふたりはとりあえず、雌伏のときを送ることを選んだ。

あくまで、一時的なものに限ってのことではあったが。

現在の翠濫の領主を務めるのはアナディーン・カスハ・イヴディーディ。

先代の翠濫の領主はハズルファン・マンナ・イヴディーディ。
だが、先々代の領主はイヴディーディではない。
先々代の領主の一族名はハリハーティ。
翠泉の恵みを翠濫すべてに行き渡らせつづけたハリハーティの最後の一族は、長たる領主の七十の誕生祝いの宴の最中、土砂崩れのために全滅した。
その場に集っていなかったのは、傍流も傍流としか呼びようのない者たちで、後にそのなかで最もハリハーティの血を濃く受け継ぐ者が領主とされた。
それが、イヴディーディの一族――。
しかし彼らは、ハリハーティの奥義を知らない。
俗世の欲と利権に目隠しされた者たちは、我欲のままに動きつづける。
その結果としての、翠泉からの加護の消失――。
それでも、彼らはまだ、目覚めない。

9

ハリハーティが領主の地位にあったころ、翠濫は本当に豊かな水の都だったのだという。翠泉の恵みを都ばかりでなく貧しい彼黄の各地に施し、国すべてを支えようとしていた。

事実、それがかなうほど、翠泉に宿る力は強大だった。

ところが、領主が変わったことで、事情は一変した。

ハリハーティの傍流にすぎぬ一族でしかないイヴディーディの者は、自らの利益をこそ優先したのだ。

ハリハーティの時代、翠泉の恵みは無償で街の者に提供された。

だが、イヴディーディの時代となってから、それは彼らの占有物となった。

無償で提供することを拒み、有料の代価を求め、商うようになってしばらくたったころ、翠泉は枯れる兆候を見せた。

最初は気のせいだとしか思えぬもので、それが現実なのだと皆が知るまでには数十年の時がかかった。

そう、気づいたとき、翠泉は枯渇寸前の状態に陥っていた。

それでも、翠泉は枯れなかった。

カンラタールの神子――ファーリィンがその力を発揮したからである。

以来、彼は翠泉のほとりに住んでいる。

翠泉を存続させるために、彼はいまもそのほとりに住んでいる。

「彼の出現は、確かにこの翠濫にとって福音だったかもしれません」

イェルネージェは思わしげにそう語った。

「彼のおかげで、翠泉は枯渇を免れた。だが……」

もしかしたら、と思わずにはおれぬのですよ、とイェルネージェは語る。

「彼の存在がなければ、あるいはイヴディーディも考えを改めたのではないのかと」

それはどうか――というのがソラミイノとガネルオージェの共通した思いだったが、ふたりは敢えて沈黙を守った。

引き出せる情報は多いに越したことはない。この先の局面で、どんな情報が役に立つかもしれないのだから。

なにより知りたいのが、アラクセイトの処遇――翠泉の主に委ねられたという――の理由だった。

罪人なら、処断するのが普通だ。

だが、領主側はそうはしなかった。

それは、アラクセイトに相応の価値を見いだしたせいだと見て、まず間違いないことと思われる。

事実、彼女にはそれだけの価値がある。

しかし、そのことを知る者は少ない。そして、知る者は皆そのことを秘めるための努力を惜しまない。

便利だとか万能という言葉を当てはめるには、彼女の能力はあまりにも不安定すぎるからである。諸刃の剣という言葉が、彼女ほど似合う人物はそうはいない。

だからこそ、わからない。

いったい誰が、彼女の価値を、領主側に吹きこんだのか……。

「あのうつけのことだから、うっかり修行中の姿を見とがめられたって線もなきにしもあらずだけど……」

真剣な面持ちで、身も蓋もないことをつぶやくのはソラミイノである。

確かにあり得る——と、ガネルオージェもうなずいているあたり、アラクセイトが知れば、「ふたりとも、ひどい」と泣き声で抗議すること間違いなしだ。

「だが、いささかできすぎてる」

冷静に、ガネルオージェが突っ込んでくる。

「あいつがイイタールの娘だってことのせいで、おれたちがこの街に足止めを食らったのはさておき、だ。それ以上のことをやつらが知る機会がどこにある？　もちろん、持って生まれた聖石以外の石を生み出すあいつの特異能力がどこからか洩れて知られちまったとしても、だ。この街に来てから、あいつが生み出したのは青い石だけのはずだ。翠濫が欲しいのは水の属性に通じる石のはずだろう？　青は木性だ。本来なら、お呼びじゃないはずだ」

それもそうだと思ったものだから、ソラミイノは難しい顔で考えこむこととなった。

「んーん？」

首をかしげた拍子に、凄まじくイヤな考えに行き当たり、彼女は思い切り顔を顰めた。

「あの娘の……それ以外の価値を、わざわざ注進したお節介がいたとでも？」

不機嫌になったのには理由がある。

それができる人物を、彼女は知っていたのだ。

それは彼女の兄――否、兄であったひと。

その肉体を器とし、かつて喪われた月神が支配する……少年。

「そんな……そんなこと、理由がないわ！」

わざわざ人間の耳にそんなことを吹きこんで、喪月神にどんな利があるというのか。

だが、ガネルオージェは違う見識を示した。

「本当に、そうか？　あいつをここに足止めできれば、それだけであっちとしては万々歳とはならないか？　少なくともあいつは何度も、喪月神の罠を切り抜けてきた……あっちにとっては厄介者だぞ？」

全部が全部、火事場の馬鹿力の賜物だってのが笑えるけどな。

ガネルオージェの指摘に、ソラミイノはすうぅっと、血の気が引いていくのを感じた。

確かに、それならあり得る、と思ったからである。

喪月神の魔手を、アラクセイトはこれまで何度も、すんでのところとはいえくぐり抜けてきた。

そんな存在を、喪月神側が邪魔だと思わないはずがない。

そして、実力による排除工作がうまくいかなかったこれまでのことを振り返り、瘴気ではなく人間社会のしがらみを利用しようと思ったとするならば……。

この状態は、非常に臭う。

ふんぷんたるものだ。

このままでは、アラクセイトはこの街に束縛されてしまう。

犯してもいない罪を償うという名目で。

あるいは街を救うふたり目の救い主と持ち上げられて。

アラクセイトは抵抗するだろう。だが、情に訴えられた場合、どこまで抵抗できるか疑わしいというのも事実だ。

あの紫紺の髪の少女は、傍で見ていて腹立たしく思うほどに、情に弱い。

困窮を訴えられ、その状況を救う力が自分にあるのだと言い聞かされれば、たやすくうなず

いてしまいそうな危うさが、彼女にはある。
そう、気づいた瞬間、ソラミイノはすっくと立ち上がっていた。
「叔父さまを、頼るしかないわね」
彼女の叔父は、この彼黄における一位神官――最高司祭――を務める人物だった。
「虎の威を借るわけだ」
こんな状況においても、あくまで皮肉に刺をまぶすことを忘れない青年に対し、彼女は胸を張って答えた。
「立ってる者は親でも使えって言葉、言うでしょ？　この際、使えるものならなんだって使うわよ」
それぐらい、アラクセイトという少女は彼女にとってかけがえのない存在であり、同時にこの先不可欠な人員でもあった。
ただし、そうするにあたっては、重大な問題がひとつあったりした。
ソラミイノは目で合図をし、ガネルオージェとの密談に入る寸前に、彼に張らせた『耳避け』の結界を解くように指示した。
多少の催眠効果も持つ結界だったこともあり、蚊帳の外に追いやられていたはずのイェルネ

ージェにその自覚はなく、どこかきょとんとした顔で、訝しげに首をかしげていた。

そんな彼に、ソラミイノは真剣な顔でこう言い募った。

「イェルネージェさま！　囚われの身となった我が友人とこの街を救うため、是非とも必要な助け手がおります。その者を迎えるために、わたしはなんとしても、この街の外に出なければなりません。どうか……どうか、お力をお貸しくださいますよう……」

本音半分、はったり半分の彼女の主張に、イェルネージェは当然のことながら難色を示したが、伊達に権門の出身ではないというべきか、彼女はこの後ガネルオージェも舌を巻くような詭弁を駆使し、見事約束を勝ち取った。

ちなみに、その同行者にはガネルオージェの名はなかった。

「お前、なあ……」

うんざりした顔で言う青年に、ソラミイノは平然と答えたものである。

「あら。だって、人質は多いにこしたことはないでしょう？」

つまりはガネルオージェも人質だというわけだ。

「大丈夫よ」

言い切って、ソラミイノはきらりと緑の瞳をきらめかせた。

「わたしは失敗するつもりなんて、ないもの」
だから、あなたも頑張ってよね。
ありがたくもない励ましを受け、ガネルオージェは翠濫に留まることとなったのだ……。

また、夢を見た。
水のなかの子供の夢だ。
水の繭に包まれて、子供は体を丸くしている。
腕は胸の上で交差されており、アラクセイトはそこになにか光るものを見たような気がした。
（まるで、なにかを守ってるみたい……）
その直感が正しいかどうかはわからない。
本当に守っているのなら、なにを――いや、そもそもあの子供はなぜ、水の繭に包まれているというのか。

そっと一歩を踏み出しかけて、アラクセイトは前回のことを思い出した。

不用意に近づいて、挙句カンラタールの子供たちの妨害にあうのは嬉しくない、と思ったのだ。

たかが夢と片づけることはできない。なにしろ、前回の夢を見た後、しっかり眠ったにも拘わらず、疲れが少しも取れていない状況に陥ったのだから。

（まあ、毎度毎度殺されかける喪月神の瘴気よりは断然ましだけど……）

水霊たちが聞けば激怒しそうなことを考えながら、彼女は対策を練ることにした。

病は気からという言葉があるが、その逆もまた真実であることを知っているからだ。

わけのわからない圧迫感や干渉のせいで、体調不良を起こしている現在、意識のほうにも余計な負担はかけたくない。疲れが取れなかったり、それどころかさらに疲れたりした場合、目覚めたときの体調が不安すぎる。

ただでさえ連れのソラミイノとガネルオージェには、これでもかと言わんばかりに迷惑をかけまくっているのだ。

無事にきちんと逃げ出す日のためにも、体調は早急に万全に戻しておきたい。

そんなこんなを考えていたアラクセイトは、今回は挨拶から入ることにした。

「あのー、もしもしー？　わたしアラクセイトだけど……覚えてるー？　そばに行きたいんだけど、いいかな？」

子供はその声を聞いてか、顔を上げた。

（やっぱり同じ……あの子だ）

と、アラクセイトは思った。

暗褐色の髪、暗灰色の双眸――以前「お姉さんは、誰？」と言ったあの子だ。

いまは……あまり苦しそうではない。

（よかった）

思わず胸をなで下ろし、彼女はさらに声をかける。

「そっち、行ってもいいかな？　いやなら無理には行かないけど」

子供は一瞬きょとんとし、次の刹那、にっこりと微笑んだ。

「うん、大丈夫だよ。今日は……っていうか、ここのところ、気持ち悪い感じが近づいて来ないから調子はいいんだ。ぼく、お姉さんにはまた会って、いろいろ話したりしたいって思ってたから、嬉しいな」

お許しをもらったアラクセイトだが、実のところ、一歩踏み出すのには少々の勇気が要っ

た。

じゃあ、とばかりに踏み出して、カンラタールの子供たちに「近づくな」攻撃をされたらかなり辛いと思ったのだ。

しかし幸いなことに、今回は水霊たちの邪魔や妨害はいっさいなかった。

(やっぱり挨拶と『お許し』かしらん？　ま、確かに一声もなく近づいてくる人間なんて、怪しいってば怪しいもんねえ。しかもあのとき、この子ってば泣いてたし……それに、とっても苦しそうだったもん)

だから、カンラタールの子供たちが、行く手を阻もうとしたのかな——。

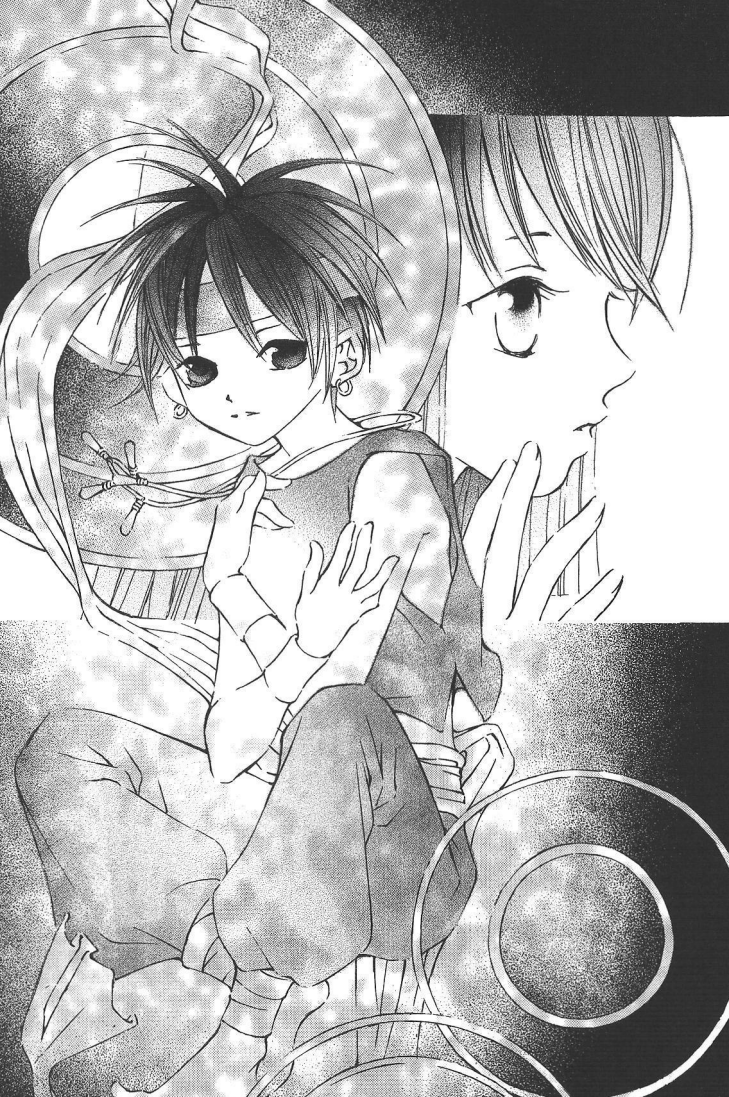
あっさりそう納得して、アラクセイトはその子に近づいた。

「元気になったみたいで、よかったね」

心からそう思い、告げると、子供は嬉しそうに笑った後、心配そうに首をかしげて問いかけてきた。

「うん。でも、お姉さんはあまり調子よくないみたいだね。この間も思ったけど……なんだかふらふらしてるっていうか……」

夢のなかでまでふらふらしてるのかぁ——なにやら情けない気分になって、彼女は小さく肩



をすくめた。

「うん……ちょっと、体調崩しちゃって……」

深く突っ込まれたくなくて——子供が翠濫に住んでいる可能性がある以上、この街に来たとたん、気持ちの悪い空気を感じるようになって具合が悪くなった、とは言いにくいではないか——彼女は慌てて話題を変えた。

「そういえば、この前はそのきらきらしたの、抱いてなかったよね？　宝物？」

尋ねると、子供は心底驚いたような顔になり、彼女を見上げてきた。

「お姉さん、これが見えるの？」

見えるもなにも——と言いかけて、アラクセイトはすんでのところでその言葉を飲みこんだ。

「ええっと……、もしかして、見えちゃいけないのかな……あ、だったらわたし、見なかったことにするし、誰にも言わないけど……」

慌てて謝った彼女に、子供はふるふるとかぶりをふることで応じた。

「……ちょっと、驚いただけ……」

だって——。

と、子供はつづけた。
「だって、カンラタールの……が……」
声が、遠ざかる。
聞こえない。
わからない。
どうか、もう少し大きな声で――。
「言ってちょうだい」
その、自(みずか)らの上げた声で、アラクセイトは目覚めた。

10

目覚めたとき、アラクセイトはそこがどこなのか、すぐにはわからなかった。
見知らぬ天井……横を向いた目に映るのは、やはり見覚えのない壁紙――。
（えーっと……）
内心首をかしげたアラクセイトは、しかし、次の瞬間感じ取った気配ゆえに、そこがどこかを理解した。
（カンラタールの子供たち……あ、そうか。わたし、翠泉（すいせん）に……）
預けられたのだ。
理由については彼女にしてもよくわからない。
（やっぱ、暴走しまくったから、かな？　被害を最小限に抑えるために、『カンラタールの神子』に預けた、とか……）

水属性は火のそれに克つと言われている以上、間違った選択とはあながち言えないが……しかし。

（大丈夫かなぁ）

と、彼女が不安に思う材料があったりした。

なにかと言えば、彼女は以前、水蒸気爆発を起こしたことがあったのだ。

もちろん、意図してやったことではなかったが、だがそれは同時に、『意図せずとも起こり得る』ことでもあるのだ。

このとき初めて、アラクセイトは「まずい」と危惧を覚えた。

なにがといえば、自らの能力を制御できないことに対して、である。

無用な騒ぎを起こすことへの不安ももちろんあったが、一番怖かったのは、ガネルオージェも指摘した『能力暴走させたあげくの火の海』状態だったりした。

言い換えれば、彼女はしっかりと自らの能力の強さと、それが暴走したときに及ぼす被害の規模を把握しており、同時にそれが自在にできぬ現実に苛立っていたのである。

しかも、この街を訪れて以来、彼女の精神的状況は悪化の一途をたどっている。

不安に思わないほうがおかしかった。

（うーん？）

一度、二度、首をかしげて彼女は思案した。

そのときである——寝室の扉をノックする音が聞こえた。

「イイタールの娘殿……？」

呼びかけられたとたん、目がすっきりと覚めた。

自然ではあり得ぬまでのカンラタールの子供たちの気配が、扉ひとつ隔てた向こうに感じられたのだ。

「え、あ、はい！」

慌てて答えを返した彼女に、扉の向こうの相手は笑いをかみ殺すような気配をみせて、そうして穏やかにこう告げてきた。

「もしよろしければ朝食をご一緒にと思ったのですが……」

いかがですか？

その提案を断る理由はなかった。

「あ、はい！　すぐに支度します！」

答えてすぐに、彼女はわたわたと着替えをした。

（わたしったら、わたしったら、他人さまのお宅で寝坊しちゃったのかしらん!?）

大急ぎで着替え、朝食の準備がされているという食堂に駆けつけた彼女は、どうやらそうではないらしいことに気づき、困惑した。

誰も、そこにはいなかったのだ。

いや、この家の主人である『カンラタールの神子』……ファーリィンは席についていたものの、ほかには誰もおらず、料理も並んではいなかった。

それはつまり、ファーリィンが彼女ひとりをそこに呼び寄せたかったという意思表示にほかならず、紫紺の髪の少女は、困惑もあらわに相手を見返したのだ。

だが、敵もさるもの――というべきか、ファーリィンは敵意を全く感じさせない笑顔でもって、銀の杯を彼女に差しだしてきた。

「どうぞ」

受け取るべきか否か、瞬時迷ったあげく、アラクセイトは受け取った。

ファーリィン自身からも、彼が手に持つ杯からも、その中身からも、恐ろしさや不快さをかもしだすものはいっさい感じられなかったからである。

「ありがとう」

と答え、彼女は銀杯に口をつけた。
入っていたのは、水だった。
清水がするりと喉を潤し、すべり落ちる。
その瞬間に確信する。
それはただの水ではなかった。
疲弊し、消耗した力を補うかのように、水に宿る力はアラクセイトの全身に沁みわたっていく。
形容しがたい充足感だった。
もし、彼女が以前、似たような感覚を味わったことがなければ、それは『カンラタールの神子の奇跡』のひとことで、片づけられたことだろう。
しかし、彼女はそれを知っていた。
「これ……っっ！」
（聖石を使った薬湯にしかない効果……だ！）
それがなぜ、水に宿っているのか。
（ファーリィンさん!?）

問い詰める目をして、振り返ったアラクセイトの目の前で、青年はうっすらと笑っていた。
謎解きはこれからだよと、言っているようにアラクセイトには思えた。

それを、ただの好意だと片づけることはアラクセイトにはできなかった。
もちろん好意からのことだろうことはわかる。一向に下がらぬ熱のせいで消耗した自分を思いやってのことだろうことは。
だが、それだけと言うには、ファーリィンの行為は意味深長に過ぎた。
なぜなら、こんな術――聖石の子供石を用いた薬湯にしかない効力を、ただの水がたたえるはずがないのだから。
恐らくは極秘事項だ。
それを、預かったとはいえ、余所者にすぎぬ自分にあっさりと明かしたファーリィンの真意がわからない。
（気づいてない……って、ことだけは、ない）

余人の目のない舞台を整えた上で、彼はこの水を差しだしてきた。

確信犯に違いない。

だが、そこでわからないことが出てくる。

この奇跡のような水を生み出す要因が、はたして『カンラタールの神子』たるファーリィンの力なのか、それとも翠泉そのものに備わっていたものなのか、だ。

しかも、わざわざそのことを教えようとでもするかのような、ファーリィンのこの行為にはいったいどんな意味が含まれているのか……。

ファーリィンがくれた水のおかげで、かなり気分はよくなったものの、アラクセイトの頭はまだまだ絶好調というにはほど遠かった。

(んー。カンラタールの子供たちの加護を受けた泉の水だからって、ここまで特殊な力が宿ったなんて前例は確かなかったはず、だよね……)

だとしたら、これはファーリィンの力と見なすべきなのかもしれないが、そう断じることも躊躇(ためら)われた。カンラタールの息子、あるいは娘についても、そうした前例は報告されていないことを彼女は知っていたからだ。

以前、それまでたやすくできていたことが突然できなくなったその理由を突き止めるため

に、彼女はかなう限りの文献を漁ったことがある。田舎の神殿のこと、蔵書は充分とは言えなかったが、主立った書籍の写しはあったはずだと思う。

無論、書物に記されることのなかった事実のひとつやふたつ、あったところでおかしくはなかったが……この場合、どう判断したものか。

（一番考えられるのは、翠泉も特殊で、ファーリィンさんも特殊で、特殊の二乗でほかでは見受けられない効果が発生したって線なんだけど……）

ただし、それには問題がある。

ファーリィンは『カンラタールの神子』ではあるが、決して『聖石の子供』ではないということだ。

（んー、んー）

いくら考えても埒が開かないので、アラクセイトはひとこと断りを入れた上で、実験することにした。

杯の中身に目をやる。

三分の一ほど、水が残っていた。

「あの……ちょっといいですか？」

そう言って、彼女は首に下げた小さな革袋を取り出した。
なかには彼女が生み出した石墨が入っている。
万一アラクセイトが暴走しても、大惨事にならないよう、小さく砕かれ、しかも数も限定されているわけだが、その一粒を取り出し、杯に放りこんだ彼女は、「ああ、やっぱり」とため息をついた。
翠泉から湧きでた水は、聖石の子供石の力と属性を吸収したのである。
根こそぎ吸収したわけではない。だから、効力としては聖石の子供石を直に煎じた薬湯ほどのものではない。
それでも、準じるだけの効力を持つことは、確か。
こんな力を宿しているのなら、翠泉の水に価値を見いだし、利用しようと思う人間は後を絶たないはず。
「どうして……」
呆然と、彼女は問いかけた。
なぜ、それを自分に明かすのか。
明かして、その先になにを求めるのか、と。

ファーリィンは答えなかった。
ただ満足そうに微笑んだだけだった。
まるで、期待通りだとでも言いたげに。

「いったいどういうことなんだ!?」
テーブルにこぶしをたたきつけ、青年は向かい側に座る少年を問い詰めた。
「どういう、とは？」
青年の怒気に怯む風もなく、少年はさらりと髪をかきあげた。
まっすぐでくせのない銀髪は、しかしすぐに彼の頬にすべりおちた。
「あの娘が翠泉に預けられた件に決まってるだろうが！　なぜそんなことになったんだ!?」
「それはわたしに尋ねるべきことではないだろう？　決めたのは領主たちだ……まあ、彼らとしても相性のあまりよくない神々の娘と息子を一緒にするのは気が進まなかったようだけど、この街の司祭じゃ、彼女の能力をうまく制御できなかったようだからね。安全策に切り換えた

というわけだろう」

こともなげに告げられた内容に、青年――ヴァディリンはさらに怒りを大きくした。

「冗談じゃない！　そんなの……ファーの負担が大きくなるばかりじゃないか！　ただでさえ最近の火事騒ぎのせいで、ファーは疲れてるっていうのに！」

焦りもあらわなその言葉に、しかし少年は眉ひとつ動かさない。

「だから、そういうことをわたしに言われてもねえ……」

我存ぜぬとでも言いたげなその態度に、ヴァディリンの眦がきつくなった。

「あの娘さえあいつらに投げ与えてやれば、ファーは自由になるとお前は言ったはずだぞ」

幻かなにかのように、突然目の前に現れたこの少年は、確かにそう言ったのだ。

そして、問題の娘を確保するための仕掛けも用意してやる、と――。

だから、ヴァディリンは領主に――アナディーン・カスハ・イヴディーディに、彼女の驚くべき能力とその価値を明かし、取り引きを持ちかけたのだ。

すべてが順調に進んでいたはずだった。そう遠くないうちに、彼は愛する兄を取り戻すことができたはずなのだ。

カンラタールの息子だという理由で、この街に縛られ、貪られる一方のあのひとを……。

（それが、なぜ、こんなことに……）

「どういうことだ。あの娘は自在に色彩の違う水晶を生み出す、奇跡の化身じゃなかったのか!?　なぜ、翠泉に預けられるようなことになったんだ!?」

彼のこの言葉に、少年はくすりと笑った。

「勘違いしてはいけないね。わたしは確かに彼女の能力が桁外れのものだとは言ったけれど、一度だって自在に、なんて言葉は使わなかった。大きすぎる力だからこそ、その制御は難しい。彼女が未熟だったからこそ、例の暴走だって引き起こせたのだよ。自分に都合のいいように解釈したあげく、こちらを非難するのはやめてほしいね」

平然たる物言いに、ヴァディリンの顔は紅潮した。

「な、なんだと……」

「それに、駆け引きもうまくない。アナディーンのような欲深な男が、美味しい餌をちらつかされたからといって、手持ちの駒を簡単に手放すと思うのかい？　彼らのこれまでのやり方を見れば、一挙両得を狙うに決まっているじゃないか。そのことをちらりとも考えなかったというのなら、ヴァディリン、きみは迂闊に過ぎたということだ」

むごい言葉だった。

とても十五、六にしか見えない少年が口にする言葉とも思えなかった。
だが、それが紛れもない事実であることも確かだった。
ぎり、と唇を噛みしめ、ヴァディリンは少年をまっすぐに見据えた。
「いまからでも……なんとかできる方法はないのか？」
あるはずだ、と彼は確信していた。
でなければ、目の前の少年が、わざわざ嬲るようなことを口にするはずがないと、どこかでわかっていた。
理屈ではなく、わかってしまうのだ。
脳裏に警鐘が鳴り響く。危険だと、やめろと、高らかに――。
だが、ヴァディリンは退けなかった。
「どうすれば……いいんだ？」
圧し殺した声で紡いだその言葉に、少年が楽しげに双眸を細めた。
それはさながら、悪戯を思いついた子供、だった。
「翠泉へ」
短く、少年は答えた。

「翠泉へ、行けばいい。行って、大切な君の兄上を連れ出せば、いい」
こともなげに言われた台詞(せりふ)に、しかしヴァディリンはかぶりをふった。

11

もしそれがかなうなら——こんなにも待つことはなかった。

本当に、それさえできれば！

「結界が、張ってあるんだ。何度も試みたけど、いつも弾き飛ばされて……」

それさえなければ、少年に言われるまでもなく、とうにやってのけていた！

どれほどの罪となろうとも、ヴァディリンにとって、兄であるファーと幼なじみの少女以上に大切な存在などないのだから！

だが、銀髪の少年は余裕たっぷりにこう答えた。

「大丈夫だよ」

甘い言葉——誘惑。

「無理だ」

揺らぎそうになったものの、ヴァディリンはほんの先程相手から受けた痛手を忘れてはいなかった。

「今度はなにを企んでる？」

「人聞きの悪い……」

苦笑まじりにそう答えながらも、少年は「なにも企むことなど……」といったたぐいの台詞をいっさい口にしなかった。

やはり、なにか企んでいるということか。

あるいはそうだとしても、そのことを認めることで誠意を示そうとしているというのか。

それとも、さらなる深い思惑があるというのか。

「なぜ……」

不意に湧き起こってきた問いを、思わず彼は口にした。

「なぜ、お前はおれの前に姿を現したんだ……？　そしてなぜ、おれの望みをかなえるために力を貸してくれるんだ？　お前は……」

なにを求めてるんだ？

「それは最初に言っただろう？」

願いをかなえてあげる——その代わり、きみもわたしの願いをひとつだけかなえてほしい。

言うなれば、それは取り引きだ。

「本当に……翠泉からファーを引っ張り出せば、兄貴は自由になれるんだな？」

念を押すヴァディリンに、少年は「もちろんだよ」と答えた。

「ただし、君自身が行かなければ意味はない。ほかの誰が行こうと、きみの兄上は翠泉を離れようとはしないだろうからね」

そう告げる少年の笑みの冷やかさに、ヴァディリンはぞくりとするものを感じた。

「お前の目的は……翠泉なのか？」

思わず問いかけた彼に、しかし少年は答えようとはしなかった。

水気を含んだ涼しい風が、紫紺の髪を揺らし、頬をやさしく撫でていく。

穏やかな陽光の降り注ぐ周囲は、あざやかな緑に溢れている。

力強い生の息吹が、大地と空を満たしている。

ここが、水の恵みに乏しい彼黄の一部だとは思えない豊かさだ。

「んー、気持ちいいー」

つぶやきながら、アラクセイトは思い切り伸びをした。

ファーリィンのもとに預けられてそろそろ五日になるが、この屋敷周辺の散策は、早くも日課になりかけている。

気持ちいいから、というのが第一の理由だが、ほかにも実は事情はある。

まず、修行が許されないということ。

これはファーリィンにやんわりと止められた。

『きみがここにいるというだけで、カンラタールの子供たちは神経質になっているからね、彼らを刺激するようなことは極力避けてもらいたいんだ』

と、そこまで言われてしまっては、反論などできるはずがない。

刺激しない程度でやりますから――なぞとは、口が裂けても言えるものではない。能力を制御しきれずに暴走させたあげく、導き手である司祭に火傷を負わせてしまったのは、まだ記憶に新しいのだから。

かといって、屋敷のなかをただぶらぶらしているのも落ち着かない。

ひとの目から自由になれるときがないからだ。

見張っているかのように、屋敷の人間は彼女から決して目を離さない。とりたてて害意は感じないから、気にしないようには努めているが、それでも気づまりなことに変わりはない。おまけに、『放火犯』と見なされているせいで、書庫への出入りは――ファーリィン自身は構わないと言ってくれたのにも拘わらず――固く禁じられてしまっている。

まあ、書物は高価なものだから、燃やされてはかなわない、と思う彼らを責めるつもりはなかったが、修行もダメ、読書もダメ、終始他人の目がついてくるというのでは、いいかげん、気も腐るというものだ。

それでもなんとか自分にできることを見つけては、手伝おうと思ったのだが、そのことごとくは屋敷の人間に断られた。

縫い物や繕い物は、燃える素材だから触らせてももらえない。

食事関連は、ファーリィンの口に入るものだからとの理由で、皿洗いすら固辞されてしまった。

怪しまれまくりのこの状況で、彼女が散策に慰めを見いだすのは致し方ないことと言えた。

もっとも、傍目にはのんびりしているようにしか見えない彼女の様子を、もしその連れふた

りが目にすれば、激怒するに違いなく、そのことを身に沁みてわかっている彼女の心中は、それなり以上に複雑だったのだけれど。

（ああぁ、ミイノの罵声が聞こえてきそう……）

親友の顔を思い浮かべながら、昨日とは違う散歩コースを選ぼうとしたアラクセイトは、次の瞬間、手の甲に衝撃を受けて立ち止まった。

「この先は立入禁止ってわけね」

ふう、とため息をつきながら、彼女は頭の中の地図の一点に、バツ印をつけた。

記しておく紙が手に入らない以上、こうして覚えておくしかないのだ。

そうして、呑気な散歩を装いつつ、彼女は周辺の調査を進めていたりする。とはいえ、怪しまれては台無しだから、『気に入った散歩コース』を大幅に逸れたりしないよう、気をつけてはいるのだが。

別に安穏としているわけではないのである……たとえ、傍からはどう見えようとも。

とはいえ、全く焦りがないわけではない。

（ガネルさん……は、大丈夫かもしれないけど……ミイノ）

不安の原因は親友の少女だ。

捕らわれてしまったのは自業自得だ。

体調を崩してしまってから気づいたとはいえ、この街を包む不穏な空気を自分は感じていた。

なにかがあると、なにかが仕掛けられていると、悟っていたのだ。

なのに、あのとき——喪月神の瘴気に触れた瞬間、生理的な嫌悪と恐怖に支配され、力を放ってしまった。体調が万全でなかったことなど言い訳にはならない。

だから、必死に祈った——ふたりの連れが巻き添えになって捕らわれたりしないことを。

能力を完全に制御できない自分と違い、あのふたりは違う意味合いによってとはいえ、利用価値が高すぎる。

ガネルオージェの、『金剛石の子供』であるという事実。

ソラミイノの、アスカニーリ神殿における名門の出であるという事実。

翠泉の恵みさえ我欲のままに利用しようとする者たちにとって、あのふたりは魅力的にすぎる。

自分のせいで、あのふたりを巻きこむことだけは避けなければならなかった。

（ガネルさんの場合、お師匠さまの子供石が欲しいからって理由で、イヤイヤ一緒に来てくれ

てたって感じだから、あんまり無茶とかしないとは思うんだけど……）

不安なのは、親友の少女だった。

（ミイノってば、一見冷静沈着って感じに見えるくせに、箍が外れたら猪突猛進しちゃうとこあるし、思いこんだら命懸けってとこもあるし、自分より弱いもの、無条件に守ろうとかしちゃうし……）

別れた際、自分が健康でさえあったなら、彼女は冷静に対処することを選んだろう……と思う。

だが、そうではなかった。

熱を出し、うんうん唸っていた自分は、確実に彼女のなかで『守るべき弱者』と認識されていたはずだ。

だとしたら、ソラミイノが一番、危うい。

「もう大丈夫なんだよって、それだけでも伝えられたら、ミイノも無茶とかしないんだろうけど……」

それは、いまはかなわない。

聖石の子供石の管理は、ソラミイノが一括して行っており、風霊に声を届けてもらう代償と

なる石も手元にはない。

唯一手元にある石墨は小さく砕かれている上に、この地で最も水霊の加護の厚い翠泉には——アラクセイト……火神イイタールの娘である彼女は近づくことさえできないのだ。

「悪さなんかしないから……お願いだからミイノにわたしの無事、伝えてほしいだけ、なんだけどな……」

ぽつりとそうつぶやき、彼女は先程衝撃を覚えた空間に指をのばした。

バチッ、と音がした。

結界は、解かれていない。

「やっぱり、駄目か……」

ため息まじりにそうつぶやいて、アラクセイトはぴしゃん、と自らの両頬をはたいた。

「とりあえずは、地道に頑張るしかないってことだよね！」

自分を励まし、散歩を再開しようとした彼女は、しかし次の瞬間、茂みから伸びてきた腕に捕らえられた。

「な……っっ!?」

声をあげようとするその口を、大きな手が覆う。

（噛みついてやるーっっ！）

天然ぽややん娘と呼ばれようと、彼女は実のところ、恐ろしく思い切りがいい性格の主だった。

そうと決めたら動くのも早い。

ただでさえ固い野生の獣の肉を、さらに干したり燻製にしたりした保存食に、幼少時から慣れ親しんできた彼女の顎の力は……けっこう、強い。

（どうでも放さないつもりなら、指の一本や二本食いちぎってでも……）

と考えた彼女はしかし、次の刹那耳を打った声に目を瞠った。

「おれだ、おれ！　頼むから、噛みついてくれるなよ」

そう告げてくる声には、いやというほど聞き覚えがあった。

（うそぉぉ）

にわかには信じられない思いで、彼女はそろそろと背後にいる人物を振り返った——とは言え、いまだ半拘束状態にある身では、相手の黒髪を確認するのがようやっとのことだったけれど——。

それでも——充分だった。

（ガネルさん、だぁ……）

ちょっと……いや、かなり安心を覚えて、アラクセイトは自分を拘束したまま解こうとしない青年の腕を軽くはたいた。

わかったから、離して――との意思表示だ。

人間には危急の際、恐慌状態に陥るタイプと、逆に胆が据わるタイプに分かれるようだが、ふたりは明らかに後者に属していた。

無論、生まれ持っての資質もあろうが、ほとんどは経験によって培われた、生きるための知恵と言えないこともない。

不憫な……。

と、言われてもおかしくない経験をたっぷり味わわされた、ふたりの聖石の子供には、しかしそんな感傷はない。

もっとも、内ひとりが覚えた感想はとんでもないことだったが。

（こういうの、もしかして『習うより慣れろ』っていうのかな？）

天然ぽややん娘は、どこまでもやはり、天然ぽややん娘なのである。



12

暴れ出したりしないことを約束して、ようやく自由にしてもらったアラクセイトは、かなりの興奮状態に陥り、「すごい、すごい、すごい」を連発した。

「すごいです、ガネルさん！　ここの結界って、半端じゃないのに……ほんと、よく入って来られましたね！　すごいです！」

心から感心しているといった体の彼女は、少し落ち着いたところできょろきょろと彼の背後に目をやった。

親友の姿を求めているのだと、すぐに目星はついたものの、ガネルオージェは素知らぬ顔を通すことにした。

能力暴走癖のある相手に対して、動揺を誘う言動は禁物である。いや、自分も他人のことが言える立場ではないという自覚はあるが、だからこそ、ということもあった。

歩く火薬庫とはよく言ったもの――よもやまさか、自分以上に厄介な存在がいようなどとは、ほんの先頃まで想像したこともなかったことなのだ。

とんでもない戦力になると同時に、恐ろしい危険分子でもある彼女の存在を、初めて知ったときには利用しようとしか思わず、おかげで大火傷を負った。

多少のつきあい方のコツはわかったとは思うものの万全とは言い難い。殊に、彼女の親友である少女がいないとなれば尚更だった。

（ここはとりあえず、誤魔化しておくか……？）

瞬時に浮かんだその考えは、非常な良案に思えたが、ガネルオージェはやめておくことにした。

なぜといえば、目の前の少女は天然のぽややん娘であることは確かだが、ときに思いがけぬ鋭さと勘働きを発揮することを思い出したからだ。

相手が、あくまでも冷静な観察眼でもって勝負してくるのなら、彼にもまだやりようはある。

相手を欺くための手管なら――あまり感心できる特技でないことは充分認識しているとはいえ――習得済みだ。

しかし相手が手練手管に縁のない、直感一本槍を持ち味としているアラクセイトでは勝手が違う。

どれだけ言動や表情を繕おうとも、感覚でもって彼女は虚偽を見抜き、暴く。

自分だけでなく、師匠ふたりも縁を持つにいたらなかったこの力を持つ相手に、下手な駆け引きなど危険だった。

師匠たちですら、そうした相手の機嫌を損ねたせいで、何度も苦労させられたという。彼の知る限りにおいて、最高の化け物じみたふたりでさえも、だ。

ガネルオージェが謙虚に、白旗をあげる気になったのは、ある意味当然のことと言えた。

相手がアラクセイトだということだけが、少し……いや、かなり引っかかったとは言え。

「あいつなら、中央神殿目指して移動中のはずだぞ。あいつの叔父貴……ええっと、なんてったか……」

即座にアラクセイトが応じた。

「グレンシードさま……？」

「そうそう、それ」

グレンシード・ティレリー・ストリーヴ。

彼黄が王都潤藍のアスカニーリ神殿、第一位の神官にして最高司祭である。

目的はふたつ――当初の予定通り、ストリーヴ家の出した自分たちに対する手配をなんとか取り消してもらうことと……この翠濫で囚われの身となったアラクセイトの身柄を、安全に引き取ってもらうこと、だ。

足手まといになったら、遠慮なく見捨てると言っていたソラミイノだが、実はそんなつもりは毛頭なかったという、いい証拠といえた。

「大急ぎで行ってくるって言って、あいつ、石のほとんどを持って行きやがったんだぜ。間違っても師匠の青玉、使い切ったりしないよう、念は押したんだが……」

それでも油断は禁物だという思いがガネルオージェにはあった。

あの少女は――いや、目の前の少女にしても同じだが――差し迫った状況に陥った場合、とんでもなく思い切りよく決断を下す癖がある。

それを懸念し、念のため、一粒でもいいから青玉を残して行け――と言った彼に、少女は頑としてうなずこうとしなかった。

『駄目よ。とりあえずとはいえ、欲しいものが手に入ったとしたら、あなた、こんな厄介な状況は御免だとばかりにどこかに身を隠すつもりでしょう？　予防措置として、青玉と紅玉はわ

たしが預かっておくことにするわ』

腹立たしいものの、正鵠を射たその言葉に、ガネルオージェは黙りこまらざるを得なかった。

砂金水晶の子供である少女は、生まれ育った環境のせいか、非常に目端が利き、やりにくい相手なのだ。

（相手がこのぽややん娘なら、いくらでも誤魔化しようがあったはずなんだがな……）

などと、不穏なことを考えていたガネルオージェの耳に、アラクセイトのつぶやきが飛びこんできたのは次の瞬間だった。

「ひとりで……？　それって、まずい……」

そうして彼女が彼に向けてきた眼差したるや……純粋にして無私、真摯なぶん、彼を追い詰めることとなった。

「ガネルオージェさん！」

必死、と顔に書いて、彼女は訴えかけてきた。

「お願いですから、ミイノを追いかけて……ミイノと一緒にいてください！　ミイノったら、自分のこと一番最後に後回しにする癖があるから……多分、忘れちゃってるんだと思うんです

けど、もしかしたら、一番危ないのはミイノかもしれないんです！　ワレンアイノさま……うう ん、違う！　ワレンアイノさまを乗っ取った喪月神は……ミイノのこと、まだ狙ってるのかもしれないんです……ううん、きっと、狙ってる！」

だのに、そんななかに、彼女がひとりで動いたりしたら――。

攫われないとも限らない。

それは、ガネルオージェにとっても歓迎できぬことだった。前述した通り、彼が欲しい青玉と紅玉は、彼女が持っているのだから。

だが――。

「いまから追いかけても無駄じゃないのか？　第一、お前らと違って、おれには気配をたどって居場所を探すなんて芸当、できないんだぞ？」

そう言ったガネルオージェに、しかしアラクセイトはきっぱりとかぶりをふった。

「大丈夫です、これがありますから」

そうして彼女は、首から細い金鎖を外してみせた。

極細の鎖には、深い緑の玉が三粒ついている。表面に砂金をまぶしたような輝きが見て取れる――砂金水晶である。

「それ……もしかして……」

言いかけたガネルオージェに、アラクセイトはうなずいた。

「ええ、ミイノの子供石です。この間、ミイノが戻ってきたあと、街で細工を頼んで作ってもらったんです。こうして――」

と、三つの玉が隣り合うように繋ぎ変え、彼女は説明する。

「ええっと……いまはミイノ、そばにいないし、カンラタールの子供たちの結界のなかだからなにも起こらないけど、街の外なら、ミイノが近づいたら、鳴子(なるこ)みたいにかたかたぶつかって音をたてるんです。普通のときは、ぶつかったりしないよう、力が調整してあるから、ミイノ探すのに、きっと役に立つと思います！」

だからミイノを追いかけてください――。

アラクセイトの言葉に、ガネルオージェは首をかしげた。

「そんなに心配なら、おれに頼んだりしないで、一緒に追いかければいいだろうが。幸い、結界は解けてるんだし」

彼としては当然の疑問であり、提案だったが、アラクセイトは困ったような顔でかぶりをふった。

「できません。カンラタールの子供たちは、わたしをここから出してはくれません。ガネルさんが入って来れたのは、ガネルさんが金剛石の子供で、わたしたちの仲間だからだと思うんです。水霊たちは、なにかをわたしたちに期待してるんです。だから、それをしないうちは、彼らはわたしを手放そうとはしないだろうし、無理やり外に出ようとしたら、今度はガネルさんまでここに閉じ込められちゃうと思います」

だからガネルさんは、どうかミイノを追いかけてください——そう告げる少女に、ガネルオージェは険しい眼差しを向けた。

「逃げ出せる可能性があるのに、おとなしくここで捕まったままでいる気か？」

詰る口調になったのも仕方ない。

彼はそれなり以上に苦労して、ここに入りこんだのだ——アラクセイトを助け出すために。その努力を無に帰すような、彼女の発言には怒りを禁じ得ない。

だが、怒気を孕んだ彼の声にも、少女は動じなかった。

「よく……わかんないんですけど、わたし、いま、ここから逃げ出したらいけないような気がするんです。少なくともカンラタールの子供たちは、わたしに……うん、わたしたちに、なにかを期待してるんです。それがなにかは、まだわからないけれど……その問題を解決しない

限り、事態は悪化する一方だと思うんです」

あまり説得力のない言葉だったせいか、あるいは彼女の必死な態度ゆえか——どちらともしれないが、ガネルオージェはなにやらかちんとくるものを覚えた。

（ひとの気も知らないで）

というのが一番近かったろうか。

アラクセイトが力を暴走させたあげく、囚われの身となったことを知ったとき、彼は自分でも意外に思うほど、動揺した。

彼女の存在の稀有さ、その利用価値を知るからこそ、ソラミイノはもちろん、彼もまた、彼女を見舞う未来を思い、胸を鷲摑みにされるような焦りとも痛みともつかぬ感覚を味わわされたのだ。

一刻も早く、救い出さねばならない——そう考えたのは自分もソラミイノも同様だった。

だから、銀髪の少女はひとり潤藍を目指し、自分は幾重にも張りめぐらされた結界を解き、ここに至った。

だのに救い出されるのを待つばかりのはずの少女が、その救出を否とする。

ふざけるなと、怒鳴りつけたかった。

どれだけ心配したと思うのか。

いいや、そんな言葉で言い表せるような心境ではなかった。

一刻も早く、その身柄を取り戻さぬ限り、胸に鉛が詰まったような、この感覚は消えないのだと……そうである以上、取り戻すしかないのだと、思い、努力したあの日々を、彼女はあっさりと否定しようとしている。

「万能の助け手にでもなったつもりか？」

苛立ちと怒りに支配された彼の声は、自分でも感心するほど冷やかなものだった。

「自分の手が、腕が、それほどに大きく広いと信じているのか？　だとしたらとんだ思い上がりというものだ」

目を瞠って、アラクセイトが「違う！」と叫んだ。

「違います、そんなんじゃ……！」

「なにが違う!?　この先ずっと、同じことを繰り返していくつもりなのか？　自分の手に余るかもしれないことまで引き受けて……？　そうして自滅するつもりか、お前ばかりか、おれたちまでも巻きこんで？」

迷惑だ。

きっぱりと、彼は言い切った。

本音だった。

そんな身勝手な感傷にはつきあえないと、彼は思ったのだ。

それこそ、命がいくつあっても足りない。

そんなものにつきあわなければならない義理は、ひとつもない。

（さあ、少しは頭を冷やせ）

冷やして、もう少しはまともな答えを出してみろ――。

と、ガネルオージェはそう思ったのだが、対するアラクセイトの反応は、彼の予想の範疇からは大きくはずれたものだった。

びしゃり、と音がした。

なんの音かと言えば、泥団子が彼の額を直撃したそれ、だったりした。

投げつけた相手は……いうまでもなかろう。

「大嫌いっっ！」

黄橙色の瞳に、大粒の涙をたたえたアラクセイトは、泥団子第二弾を手に、振りかぶりながら叫んだのである。

「ガネルさんなんか、大嫌いっっっ！」

結局、そうして、彼は予想外のアラクセイトの反応にたじたじしつつ、退散を余儀なくされたというわけである。

後になってあれこれと、あれも悔しい、これも悔しいと思い、悔いることしきりとなった彼であったが、このときは完璧に彼女の勢いに飲まれてしまっていた。

（どう考えたって、おれの言い分のほうが正しかったはずだぞ）

そう思いつつも、彼は結局、ソラミイノを追いかけるための荷造りの手をゆるめることができなかった。

それはやはり、アラクセイトの懸念を否定できなかったから、ではあったのだが。

（知るか。知るものか）

怒りのままにソラミイノを追いかける準備をする自分の行動が、実のところ、アラクセイトの願いを聞き入れたものであることに、このとき彼はまだ気づいてはいなかった。

13

翠泉のほとりの館の、自室に戻るなり、アラクセイトは枕をばしばしと寝台に叩きつけ、不満の限りを口にした。

「あううううぅぅ……」

「なによ、なによっ！　言いたいことだけ言ってくれちゃって！　わたしのいうことなんか聞こうともしないでっっっ！　ひとのこと、我が儘三昧の贅沢ものみたく言ってくれちゃって！　そんなんじゃないのに……そのこと、説明しようとしてるのに、その時間も許してくれなくて……ガネルさんの石頭！　聞く耳持たずの唐変木！」

喚くだけ喚いて、それで少しは気が晴れたけれど、大本の部分では全然気が晴れなかったから不完全燃焼気分が抜けないまま、だったりしたのである。

「なんで、あんなこと、言われなくちゃならないわけ!?」

自分は、感じたままを彼に伝えただけなのだ。
ここの……カンラタールの子供たちが、訴えるに訴えられない思いを自分にぶつけてきて、それを受け入れたということを――。
事情はわからないけれど、水霊たちの訴えは真摯で切実で……だからこそ、その問題を解決しない限り、解放してもらえそうにないと……そう説明するつもりだったのに。
みなまで言わせず、「いい気なものだ」とは、あまりな言いようではないだろうか。
「そりゃあ、ガネルさんがここに苦労して来てくれたってことはわかるけど……」
それなのに、助け出すつもりの自分が逃げないと言い出したのでは、面白かろうはずもないけれど。
（う、ん……それを考えると、ガネルさんが怒るのも無理ないとかも思うけど……）
怒りが徐々に治まってくるにつれ、アラクセイトは自分のほうが悪かったような気がしてきた。
とはいえ、謝るために追いかけようとまでは、まだ思えなかったのだが。
「ガネルさんもわたしも、頭に血が上ってたから、まずかったのよね、うん。ふたりとも喧嘩腰じゃ、通じる話も通じないもん」

とは言え、どうも先程のガネルオージェの様子から考えて、すぐには無理なような気がしたし、もし怒りつつも彼がソラミイノを追いかけてくれるつもりなら、しばらくは会えそうにないわけだが。

（わたしはここの結界から出られそうにないし……だったら、このお屋敷のひとに伝言を頼むとか……？　いまならまだ出発はしてないだろうし……あ、でも、ファーリィンさんはともかくとして、ほかのひとたちって、どれぐらい信用していいんだろう？　ガネルさんまで捕まったら、ほんと、目も当てられないし……）

などなどと思案していたアラクセイトはしかし、すぐに重大な問題点に気づいた。

「ああぁぁっ！　わたしったら、わたしったら、伝言にしても手紙にしても、ガネルさんがいまどこにいるのか聞いてないじゃないっ！　わー、わたしの馬鹿馬鹿馬鹿！」

風霊に『お使い』を頼めば、きっと探し出して届けてくれるのだろうけれど、現在彼女は彼らが大好きな青か紫の聖石の子供石を持っていない。

以前のように、瞑想すればもしかしたら青金剛石を生み出すことができるかもしれないが、この街を訪れて以来力が不安定になっていることを考えれば、止めておくに越したことはないのは自明の理というもの。

能力を暴走させたあげく、ただでさえぴりぴりしている水霊――カンラタールの子供たちを刺激するのはどうにもよくない。

「わ、わたしってば、本当に使えない……」

半ば呆然とつぶやいたアラクセイトの耳――いや、脳裏に、玻璃同士がやさしくぶつかるような、しゃらしゃらという音が響いたのはそのときだった。

（あ……）

現実の音ではない。

けれど幻聴でもない。

（これ、水の……カンラタールの子供たちのささやきだ……）

必死に、なにかを語りかけようとしている――それがわかる。

けれど――。

（ああ、でもなにを言ってるのかがわからない……！）

アラクセイトは火神イイタールの娘――その加護と気配が魂に深く刻まれているために、水霊との接触が一番難しいのだ。

（ほかの精霊たちの声なら、もっとよく聞こえるのに……）

いや、この地に集う精霊たちが、ここまで神経質になっていなければ、場は和らぎ、さほどの障害とはならなかったかもしれない。アラクセイトはかつて、水霊たちの声を何度も聞いたことがあるのだから。

（あ、わからないのに、どんどん声が大きくなってく……わからないのに！　本当に、なに言ってるかわかんないのに……）

耳を塞いでも効果はない。

それは現実の声ではないから。

声はより高く、より強くなっていく。

ついに、アラクセイトは叫んだ。

「やめてーっっっ！」

その瞬間、意識が遠ざかっていくのを感じた。

カンラタールの子供たちが騒いでいた。

それを感じながら、ファーリィンは自室でただ座していた。
否、それは座しているというのとは違う。長椅子に半ば身を投げかけ、必死に耐えていたのである。
カンラタールの子供たちのあげる悲鳴が、彼の心臓をしめつける。
歪められた理ゆえに、翠泉の水霊たちは苦しんでいる。
肉持たぬ彼らの嘆きと痛みは、肉持つファーリィンには肉体的苦痛として伝わってくる。
胸を刺す痛み、臓腑を抉られるかのような苦痛、心臓を鷲摑みにされるかのような苦悶……
『あの日』以来馴染みとなったこの痛みを、苦しみを、しかし彼は愛していた。
この痛みを受け入れつづけている間は、彼の故郷は約束されているのだから。
あの日、一度、失われてしまった故郷。
冤罪を着せられ、それを雪ぐ機会さえ与えられずに果てた父――そのひととともに消え失せてしまった故郷。
ファーリィンは、故郷が欲しかった――どうしても。
自分のために、そしてあの夜、自分の腕のなかで泣いていた弟のために。
だから、この街で、必要とされたときは嬉しかった。

自分がこの街で有益な存在である限り、街もまた自分と弟を受け入れてくれるに違いないと思ったからだ。

ようやく、自分たちの故郷が手に入る。

その思いに駆られ、かなりの無茶もした。

体調を崩すことも度々だった。だが、その程度のことで、ここが自分と弟の故郷になるのであれば、かまわないと思っていた。

そんな自分の行為が、弟と幼なじみの少女の心を追い詰めていたなどとは、想像もしてなかったのだ。

弱る自分の身を案じ、大切な弟と幼なじみの少女は暴挙に出た。

騒ぎを起こして、自分をこの翠泉から連れ出そうとしたのだ。

翠濫の中枢が、認めるはずも、許すはずもないことだというのに。

そうしてあの日、悪夢は繰り返されたのだ。

人質の意味も兼ね、一緒には暮らせずにいた弟――ヴァディリンが、夜中に訪れた。

なぜ、どうして、と問いかける自分の声には耳も貸さず、「いいから！」と強引に引っ張りだそうとした。

『いいから、来るんだ！』

手を引く力に、自分は必死に抵抗した。

なぜなら、知っていたからだ。

精霊たちの、加減を知らぬ執着というものを。

彼らは好ましきものに思い入れし、その邪魔するものを許さない。

邪魔する者は、彼らにとって、すでに悪しきもの、なのだ。

悪しきものを相手どったとき、精霊たちに容赦はない。

だから……というわけではなかったが、ファーリィンは必死に自分以外の親しい人物と、精霊たちが接触する機会をさえぎることに全力をあげた。もっとも、ヴァディリンに関しては、それだけではなかったが。

『行けない。行くわけにはいかない』

そう告げたときの、弟の傷ついた顔は、いまもファーリィンの心をしめつける。

だれより大切に思う相手を傷つけたという痛み――だが、彼にはそうすべき理由があった。

否、そうしなければならなかったのだ。

（お前は知らない……）

そしてこれからも、決して知らせるつもりのない秘密――。

結局騒ぎはすぐに鎮められ、弟は危険思想の持ち主として、翠濫から追放されることになった。もっと厳しい処罰を求める声もあったのだが、ファーリィンの弟であるという事実と、彼が弟をこよなく愛していることを考慮し、そこに落ち着いたのだ。

下手にヴァディリンを処分し、ファーリィンの機嫌を損ねることこそ、上の者たちは恐れたのだ。

あれから三年――カンラタールの子供たちのおかげで、弟が無事であることは感じ取れ、その喜びを噛みしめる日々を送ってきた……もうしばらくの辛抱だと、自身に何度も言い聞かせながら。

あと二年……いや、三年以内に、潰えたかに見えた夢はかなう。

翠濫への献身は、そのための布石だ。

自分がなにを考えているのかを知れば、幼なじみの少女はきっと、嫌悪に顔を歪めるに違いない。

自分のために怒り、悲しんでくれる彼女と弟は、本当の意味で真っ直ぐで純粋な人間なのだから。

だからこそ、気取らせるわけにはいかない。
一生欺瞞の仮面を被ることになっても、あのふたりこそは、彼の決して失えない宝なのだから……。
心は決まっている。
大切な者たちを取り戻すためならば、この手が罪にまみれることなど、どうということもないではないか。
だが……。
（問題は、あの客人たちだ……）
不意に現れた三人の聖石の子供たち――。
彼らが翠濫を訪れてからというもの、明らかにカンラタールの子供たちが落ち着きをなくしたことが気にかかる。
この屋敷に預けられた少女がイイタールの娘だからだと考えれば、辻褄はあうような気もするが、それだけではない、なにかを感じるのだ。
あの紫紺の髪の少女だけではない、先日イーオダールの子供たちを使い、街に自分を連れ出した青年に対しても、同じ印象を受けた。彼は間違っても、ヴィクティーンが勘違いしたよう

な、イーオダールの息子などではないというのに！

よくよく考える必要があった。

（あの、胸に圧迫感さえ覚える神気……確かにただの聖石の子供ではない）

だが、そうでなければなんだというのか。

使徒であるなら、神官たちが気づかないはずがない。そして、いかに欲と俗に染まった神官であろうと、神の加護を受けた使徒たちを、道具扱いできるはずはないのだ。神に選ばれた者を私することは、神を敵に回す行為にほかならないのだから。

大地に拒まれては、人間は生きてはいけない。

（では……何者だというのか……）

本当に、ただの聖石の子供なのか、あるいはそうと見せかけた、違うなにかであるのか。

いくら考えても、これだけはわからなかった。カンラタールの子供たちは、なぜかこの疑問にだけは答えてくれないのだ。

（いま少し、見極めるための時間が必要だということか……？）

だとしたら、より親しくあの少女とつきあうべき、ということになる。

素直で迂闊な少女からは、それなりの情報を引き出していたが、まだ十全とは言えないとい

うことか……？

（あるいは、彼女自身、自らのことをわかってはいない……とか？）

そう思いついた瞬間、ファーリィンはあり得そうなことだと思った。

同時に、だとしたら厄介この上ないとも思った。

ひとは、自らが知らぬことを語ることはできない。

彼女の使命、彼女の存在意義、彼女の能力――自身では知らぬまま、彼女が生きているのであれば、いかに問いただそうとしても、それは無駄な行為に終わる。

だが、手がかりとなるのが、彼女しかいないというのもまた事実だ。

（さて、どうしたものか……）

半ば瞼を伏せ、考えこみかけたファーリィンの耳に、玻璃の窓をたたく小さな音が飛びこんできたのは次の瞬間だった。

コツン、コツン、コツン。

慣れ親しんだ人物の訪問を告げる合図に、即座に彼は表情を改めた。

気だるさと物思わしげを漂わせていたのが嘘のように、彼は少し淋しげな、だが温和そのものといった仮面を即座につける。

そうして、私室の窓に近づき、開いた。
窓の外に立っていたのは、頬を上気させた少年だった。
その名はイスリン・マナス・イヴディーディ。
翠濫領主アナディーン・カスハ・イヴディーディの長男である。
「また、抜け出してきたのかい？」
困ったような微笑をたたえ、たしなめるようにファーリィンが告げると、少年はむっとしたように眉をひそめた。
「だって、こうでもしないと、あなたとゆっくり話すこともできないじゃないか。昼間はわやわや煩い見張りがついてるし……」
幼さの勝る口調で反論してくる少年に対し、仕方ないとばかりに肩をすくめ、ファーリィンは手を差しだした。
「仕方ないね、おいで。このまま追い返したほうが、よほど危なそうだ」
イスリンの顔がぱっと明るくなった。
その無邪気な笑顔に一片の痛みを覚えながらも、ファーリィンは仮面の笑みを崩さなかった。

罪に身を浸す覚悟を決めた以上、その果ての結果を受け入れるのは義務だと思っていた。
だから、彼はどこまでも涼やかに微笑む。
他人に罪を唆す以上、あらゆる意味での怨嗟を受け入れる程度の覚悟は必要最低限だと、彼自身はわかっていた……。

14

巡礼の旅なるものがある。

正確には神々が奇跡を起こした場所を自らの足で巡り、祈りを捧げるのが本来の意味であるのだが、昨今、そうではない意味合いのものが増えたこともあり、意味は広く扱われるようになりつつあった。

真の奇跡が生じた場所など、数える程度しかないという現実を踏まえた結果、それに準じる場所を選定するというのは、明らかに神殿関係者による作為であったが、貧しい者の救いになったこともまた事実ではあった。

聖地と定められた土地以外であっても、王都の神殿に詣でれば、それは聖地に巡礼したのと同じ意味を持つと言われ、救いを見いださぬ者がいようか。

（ああ、もう、みんな、騙されてる！）

などと正直この上ないことを考えてしまうのは、こざっぱりとした男性用の上下に身を包んだ一見少年、実は少女であるソラミイノだった。

薬師イェルネージェの伝を借り、王都への巡礼団に潜りこむことに成功した彼女は、用心のために男装することを選んだのだ。

長い髪は少年には珍しいものだったが、生涯をかけた願をかけた者であれば、あり得ないことではなかったし、その説得力を出すために、彼女は神官見習いの衣装を手に入れていた。資金源はもちろん、師匠たちからもらった聖石の子供石である。お守り石として、高額で取り引きされる子供石は、これまでも何度か、彼女たちの懐を救ってくれたものだ。

（でも、いいかげんにしとかないと、あっと言う間に底をついちゃうわよね。わたしのとかあの男の子供石が売れるんなら、話は早いんだけど……）

あいにく、使徒に選ばれていない者の子供石を『守り石』にするには、神殿による門外不出の秘儀が不可欠とされている。手配されている身では、とてもその方法は使えない。

考えても仕方がないことなので、ソラミイノはあっさりと思考の方向性を変えた。なにしろいまは緊急事態、考えなければならないことは山積み状態なのだから。

（ま、それはおいおい考えることにして……うーん、思ったより時間がかかりそうなのが計算

違いだったわね）

荷物の運搬や、子供、病人を運ぶための馬車や、護衛陣が乗る馬はあったが、基本的に徒歩での旅なのだ。

おまけに神官見習いを装っている以上、楽な方法を選ぶのもよろしくない。

おかげで、予想外に時間がかかってしまっている。

（翠濫からは、もうけっこう離れたことだし、ここはもう、夜にこっそり抜け出して、イーオダールの子供たちに頼んだほうがいいかしらん？）

幸い、風霊たちが好む子供石にはまだ余裕がある。

青玉はともかく、紫水晶も杉石もある。

風霊たちに頼めば、王都潤藍へは、きっとあっと言う間のことだ。

が、しかし――。

しかし、だ。

わかってはいても、そう単純に踏ん切れない事情というものが、ある。

ひとことで言うなら、それはソラミイノの資質というか、体質に起因するものだった。

木は火を生ず、と言う。

イイタールの娘でこそないものの、生来炎と近しくしてきた彼女には、ある意外な弱点とでも呼ぶべきものがあったのだ。

つまり、風霊と語り合うとき、彼女の精神は尋常でなく高揚するのだ。

なんでもできる、どこまでも行ける――いっそ、限界まで極めるとすれば、どこまで行けるものか、それを試してしまいたくなる。

火神の娘であるアラクセイトほどではないが、そうした困った『副作用』は、彼女にもあるわけで、だからこそ、こうした一刻の猶予も許されぬ場合の障害となる。

（ものすごーくいい気分になったあげく、我に返ったら実は目的地はとっくに通りすぎちゃってましたってのは、いまの状況じゃ本当に笑えないし……）

だから、風霊操りに関しては、引きずられる可能性の低いガネルオージェに――ついでに言えば、三人中一番慣れていたということもあって――一任していたのだ。

が、ここに彼はいない。

翠濫に潜伏し、機会があればアラクセイトを救い出してくれるよう、頼んだのだから当然である。

親友ながら、いや、親友だからこそ断言できるが、アラクセイトはある意味無茶苦茶なの

だ。

ほとんどの属性に通じる金剛石を生み出す能力もとんでもないが、それ以上に恐ろしいのは彼女が理性や知識でなく、直感でもって事態を終息させてきたということだ。

以前ほどではないとはいえ、あの紫紺の髪の親友は、いまだに自らの能力を把握しきれてはいない。

それはつまり、どんな『大失敗』があっても不思議はないということで……。

と、そこまで考えたとたん、ソラミイノは思わず、胸元に手を当てた。

(想像するだけで胸が凍りつきそう……)

だが、半人前という意味においては、自分も親友も、そしてあの男も、変わりはしないのだ。

半人前だから、こんなにも苦労しているのか、それともなまじ便利な方法を知ってしまったからこの状況に苛立ちを覚えてしまうのか、それとも経験不足からくる不手際が、事態を遅延させているのか……。

(恐らくは、全部だわ……)

ため息をつきたくなるが、それでどうにかなるわけでもない。

（精進、なにごとも精進というわけよね）

願わくば、無事に潤藍のアスカニーリ神殿に到着し、叔父であるグレンシードの助けを得、翠濫にとって戻るまで、親友には更なる騒ぎを起こしたりせずに、おとなしく待っていてほしいものだが。

（む、難しいかも……）

そう確信できてしまうあたりが悲しい。

と、そんなこんなで頭を悩ましていたときのことである――隣を歩く子供連れの女性の声が耳に飛びこんできたのは。

十歳ぐらいだろうか――女性のとなりを歩く女の子が苦しげに咳きこむのに、なだめるような声をかけている。

「ほら、水をあげるから……もう少し、辛抱おし。もうちょっとで休憩になるからね、だから……」

女の子は、涙ぐみながらこくりとうなずき、水の入った革袋から、一口だけ水を飲んだ。本当はもっと飲みたいのだろうに、限られた水を必要以上にはとろうとしないその自制心に、ソラミイノは驚きを覚えると同時に、彼黄という国がどういう地であるかを再認識した。

水の恵みに乏しい国なのだ――ここは。

現に翠濫を離れるに従い、大気は乾燥していくばかり。土埃は喉を傷つける。

埃から鼻や喉を守るための覆い布はあっても、その織りが荒ければ、あまり効果は発揮されない。

見れば母子の口元を覆う布は、織りが荒い上に、端に綻びすら見えるものだった。しかも一重ときている。

これでは細かい砂塵を防ぐことはできないに違いない。

ソラミイノは一行の歩みに遅れないよう歩きながら、翠濫で整えた荷物の中身を手さぐりで引っ張りだした。

万が一、怪我したときのためにと用意していた幅広の包帯を見つける。

イェルネージェが譲ってくれたそれは、清潔な木綿製のもので、彼女はそれを手持ちのナイフで顔幅ほどに切り取り、半分にたたんだ上、ユーカリの精油を一、二滴したたらせた後、隣を歩く女性に差しだした。

「これを、お嬢さんに」

歩きながらの作業だったから、けっこうもたついてしまったのだが、娘の様子にかかりきり

だったらしい母親は、心底から驚いた顔で彼女を振り返った。
「これで砂塵はかなり防げるはずですし、ユーカリの精油は、鼻の通りをよくする効果があります。少しは楽になると思いますから」
母親であるその女性は、最初、訝しげというか、不審そうな目を向けてきたのだが、差しだされた木綿に鼻を近づけるなり、はっとしたように彼女を見つめた。
「この香り……薬師さまのところで嗅いだ覚えが……あなたさまはもしかして、薬師さまなのですか？」
薬師、という一言に、周囲の皆が興奮したような声を上げた。
（え、まずかった？　もしかして、このままじゃ、とってもまずい……？）
かもしれない。
咄嗟にそう判断したソラミイノは慌てて言い訳した。
「違います！　見習いです！　あくまで見習い！　だからたいしたことは……」
できない、と言おうとした彼女の言葉は、しかし周囲の耳には届かなかった。
気がつけば、十重二十重に取り囲まれ、いつのまにやら彼女は『薬師さま』扱いを受けることになっていた。

そうして初めて彼女は知った。

この国――彼黄において、聖石の子供石を用いた薬湯は、限られた階級の者たちにしか与えられることがないということ。

すなわち、王族や権門（けんもん）しかその栄誉に浴することができないのだ。

拒（こば）まれた者たちは薬師へと集う。

だが、それも完全ではない。

なぜなら、この彼黄の地は貧しい土地柄で、充分な薬草を確保できるだけの力がないからである。

貧しい土地、貧しい国。

なのに翠濫は豊かであり続け、潤藍もまた豊かであり続けている。

それは……なにか、おかしくはないか……？

（叔父さまに会って、このことは是非とも伺（うかが）わなければならないわ）

薬師と誤解を受けたせいで、一気に忙しい日々に突入せざるを得なくなったソラミイノはこっそりとそう考える。

イェルネージェの機転のおかげで、二粒ほどの聖石の子供石と引き換えに、譲（ゆず）ってもらった

薬草やら精油をあれこれ調合し、「薬師さま！」との呼びかけに、必死に答えながら、ソラミイノはいまはまだ見えぬ疑問と矛盾に気づきかけていた。

（あの街、だけじゃない……きっと。ここは……この国全体が、もしかしたら、おかしいのかもしれない……）

まだ、確信は抱けないけれど――。

なにか障害があるのなら、それは解決しなければならないと、ソラミイノは心に決めた。

「ほら、これが結界を壊す二粒目の鍵」

銀髪の少年が、やさしく微笑みヴァディリンの手にそれを渡す。

ヴァディリンは憮然としたまま、自らの手のうちに転がる石に目を落とす。

「これで全部か？」

尋ねた彼に、銀の髪の少年はかぶりをふった。

「まだだよ。まだ、たりない」

「足りない……だと？　焦らしているのか？」

敵意をちらつかせながら問いかけたヴァディリンに、少年は愉快そうに肩をすくめた。

「お馬鹿さんだねえ……物事には手順というものがあるんだよ。正しい道具に正しい手順。それを無視しては、開く扉も開きはしないよ。結界を解くというのはね、君が思っているよりずっと、複雑で繊細な行為なんだから」

馬鹿にしきったようなその物言いに、ヴァディリンが眉間にしわを寄せた。

彼の機嫌の悪化に気づいていないはずはない少年は、しかし笑みを崩すことなくこうつづけた。

「カンラタールの子供たちの結界は強力だよ。きみは、その隙を突いて入りこまなければならないのだもの。細心に細心の注意を重ねたところで、やりすぎだということはないよ」

肩を怒らせたままのヴァディリンは、しかし少年の言い分に理を認めたのか、重い息を洩らした後、低く、問うた。

「手順とは、具体的にどういったことが必要なんだ？」

少年はくすくすと笑う。

事態が自分の思い通りになったことを、当然と思っているようにも、相手の反応を楽しんで

いるようにも見えた。

「みっつめの鍵になる石がまだ見つからないから、しばらくは机上の空論なんだけどね。揃ってしまえば、簡単だよ。三つの石に、君の血を吸わせればいい。そして、ひとつめとふたつめの石を、誰かに託して結界の内部に持ちこんでもらえばいいんだ」

あっさりと告げられた内容に、しかしヴァディリンは眉宇をひそめた。

「誰かに……？」

「そう。幸い、君の幼なじみは、翠泉に出入りする許しをもらっていたはずだよね。彼女に頼んで、所定の場所に石を配置してもらえば……」

あとは簡単だとでも言おうとしたのだろう少年の言葉を、ヴァディリンが凄まじい剣幕でさえぎったのはその刹那のことだった。

「駄目だ、駄目だ、駄目だ！　ヴィークをまきこむつもりはない！」

少年が、不思議そうに目を瞠った。

「どうして？」

心底、わからないとでも言いたげな顔をした相手に、褐色の髪の青年は、何度もかぶりをふりながら答えた。

「当たり前だろう!?　ヴィークにも、ヴィークの親父さんにも、おれたちは言葉に尽くせないぐらい親切にしてもらったんだ……なのに、三年前、おれが短慮を起こしたばっかりにヴィークを頼って、巻きこんで……」

彼女の関与を、ヴァディリンは結局最後まで認めなかった。

証拠に残るようなことを頼んでいなかったこともあり、彼女が罪に問われることはなかった……けれど。

限りなく黒に近い灰色――と認識されたヴィクティーンとその家族が、以来針の筵に座らされたも同然の境遇に陥ったことを、彼は知っている。

裕福で、広大な屋敷を持っていた彼女の父親の事業は傾きかけている。

翠泉を救う『カンラタールの息子』を余所に連れ出そうとした者たちに係わりある者――それだけで、翠濫に住む者たちはいともあっさりとかの一族を社会から締め出そうとしたのである。

同じことが、もう一度繰り返されたとすれば……そのときは。

幼なじみの少女とその一族は、間違いなくこの街そのものに抹殺されてしまうだろう。

そんなことにはさせられない、断じて！

「それだけは、できない」
確固たる決意をたたえ、きっぱりと言い切ったヴァディリンに、少年はなおも笑う。
「ふうん？　でも、どうやって？」
正面から問いかけられ、ヴァディリンは刹那、言葉に詰まった。
「す、翠泉に出入りを許されているのは、なにもヴィークだけじゃないだろう!?　あいつ以外にだって、中に入りこめるやつはいるはずだ」
そう言った彼の言葉をあざ笑うかのように、少年が揶揄の言葉を操る。
「そうだね、確かに。だけど、君はまだこの街では追放されたままなんだよ？　お兄さんが翠泉を救うカンラタールの息子だったからってだけの理由で、本来死罪になるはずが、命を救われて、追放処分に減刑されて……みんな、そのことを忘れてはいないだろう？　そんな街の誰が、きみのために働いてくれるというんだい？」
ぐさりと、胸を突き刺す言葉だった。
確かにそれはその通りなのだ。
翠濫の豊かさを支える翠泉の主――ファーリィンを連れ出そうともくろんだ彼のことを、みなは忘れず、憎みつづけている。

だが、たとえそうだとしても、やはりヴィクティーンを巻きこんではならないと、彼は思わずにはいられないのだ。

「だ、だったら！　例のイイタールの娘がいるじゃないか！　アナディーンに図って、あの娘をこちら側に引き出して……それで、石を結界のなかに持って行かせれば……」

必死に告げた言葉を、少年は石ころかなにかのように蹴り飛ばす。

「アナディーンが、三年前の君の凶行を都合よく忘れてくれているなどと、まさか期待してはいないよね？」

「だけどおれは、その罪を白紙に戻しても釣りが来るぐらいの話を持って行った！　あのイイタールの娘にして色とりどりの水晶を生み出す娘さえ支配下に置ければ、翠泉はファーひとりに頼りきる必要なんてなくなって……！」

五属性すべてに力を発揮できる人材を差しだせば、水にしか効力を持たないファーリィンは解放されるに違いない。

そう思ったからこそ、少年から教えられた情報を手に、ヴァディリンはアナディーンを訪れたのである。

だというのに――！

「全部、無意味だというのか!?」
問いかけたヴァディリンに、銀髪の少年は曖昧(あいまい)な笑みで応じた。
「そんなことは言ってない」
意味ありげな光が、その銀の双眸(そうぼう)に宿る。
「君たち、次第、だよ」
くすくす笑いながら、彼はそう告げた。
同時に、「言われなかった」言葉が耳に飛び込んできた。
「さあ、どの道を選ぶ?」
つきつけられた言葉は、白刃(はくじん)そのものに思えた——。

15

夢のなか、男の子は幸せそうに微笑(ほほえ)んでいた。
大事そうに、光の繭(まゆ)を抱きしめたまま――。
『そんなに、その繭が大事？』
尋(たず)ねると、男の子はためらいもなくうなずいた。
『だって、たったひとりきりの家族だもの』
と――。
『ひとりきりの？』
『うん』
『ただひとりの家族？』
『うん』

そうして男の子は、愛しげに繭を抱く。

『もう、この子だけなんだ』

告げる声には悔いも痛みも宿ってはいない。

『この子だけ……だから、もう迷わなくていいんだ。この子さえ守れればいいんだから……もう……』

『その子だけを守るの？』

問いかけると、子供は傷ついたような顔になった。

『お姉さん、意地悪だね』

きつい声で、子供は言い放った。

『本当は、ほかにも守りたいひとはいるよ。でも、どうやって守ればいいっていうの？守りたい全員を包みこむには、ぼくの手は小さすぎる。卑下なんか、したくない。するつもりもない。でも、ぼくの手が小さいことは、まぎれもない事実なんだ』

それがわかっていて、ほかになにをぼくに望むの？

光の繭を抱きしめながら、男の子は敵意もあらわにそう言い募る。

それ以上、内に入り込めず、アラクセイトは困惑する。

手がかりがあるようでないようで……取っかかりがあるようで、ないようで……。
ただひとつ、わかるのは、男の子にとって、その繭がかけがえがないということ——。
そして、男の子は、頑なまでに光の繭を抱きしめる——。
なぜだろう、とアラクセイトは思った。
それは、先日までの印象からはかけ離れたものだった。
あの子供は、どうして頑なな態度をとるようになってしまったのだろう……？
以前はすっきりとわかったことが、いまではよくわからない。
夢、だからなのか……それとも介入があったから、なのか——。
わからない。

前途多難を絵にかいたような状況のなか、糸口らしきものが見つかったのは、夢を見てから二日後のことだった。
ヴィクティーンが翠泉を訪れたのである。

先日、領主の屋敷に訪ねて来てくれたとき以来だ。

尋ねたいことがある上に、説明しなければならないこともあったので、アラクセイトは声をかけようとして、あることに気づき、胸をおさえた。

（そ、そういえばわたしってば、放火犯扱いされてるままなんじゃ……）

最後の一件に関してだけは、申し開きのしようのない事実だったが、それ以外はすべて冤罪である。

が、アラクセイトがここに身柄を移されて以来、火事騒ぎが収まったらしいことも考えれば、ヴィクティーンの彼女に対する心証が悪くなっていないとも限らない。火事の度にファーリィンが駆り出され、その能力を使うことになったのを、彼女がたいそう憤っていたという話を、少しだが親しくなった——屋敷の主である青年のおかげなのだが——厨房の女性から聞いていたから尚更不安だった。

（わたしじゃないって言っても、最後のやつは間違いなくわたしの仕業なんだし、信じてもらえるかな？　でも、じゃあ誰がって聞かれたら答えられないし……）

おまけにソラミイノもガネルオージェも姿を消したままとあっては、かなり難しいような気がした。

が――。

（えーいっ！　女は度胸！）

よくわからない言葉で自らを叱咤激励し、彼女は勇気を振り絞った。

事態を把握するためには、材料はひとつでも多く欲しいところなのだ。怯んでいる場合ではない。

本人あまり自覚していないが、アラクセイトはけっこう……いや、かなり思い切りのいい性格の主なのだ。

「ヴィクティーンさん！」

その声に振り返ったヴィクティーンは、アラクセイトを認めたとたん、大きく目を瞠った。

「アラクセイトさま!?　どうしてここに……神殿にいらっしゃるのではなかったのですか!?」

表情といい声といい、敵意はかけらも感じられない。

これはどうしたことだろう。

（えーっと、もしかして、ヴィクティーンさんは噂とか信じないでいてくれたってことかな？それともあのあと真犯人が捕まった、とか？）

だが、もしそうなら、自分がここに足止めされている理由がわからなくなる。

（あ、でも確実に一件はわたしのせいだから、間違っても同じことにならないように隔離されちゃったんだとか……？）

実にあり得そうな話で、即座に否定できない。

（うーん……）

数瞬迷った後、彼女は正直に打ち明けることにした――ただし、洗いざらいではなく。

「あ、その……司祭さまに指導していただいたんだけど、修行がうまく行かなくて……それでここなら大丈夫だろうってことになって……その」

能力を暴走させたあげく、部屋を半壊したことは、さすがに恥ずかしくて口にできない。

が、そんな彼女の心中を知ってか知らずか、ヴィクティーンは得心がいったとでも言いたげな顔でうなずいた。

「ああ、なるほど。アラクセイトさまは近々準使徒さまに選ばれるほど、稀有な御方ですものね。ここなら確かに万全の態勢でお守りできますし……」

耳慣れない言葉に、アラクセイトはきょとんとした。

（準使徒……!?　そんなの聞いたことないんだけど……）

第一、自分の放火の嫌疑はどうなったのか。

いや、もちろん晴れたのならそれに越したことはないのだけれど、なにやら話が大きくずれてしまってはいないか？

これは、どうにも本格的に話を聞く必要があると思い、彼女ははっしとヴィクティーンの腕を摑んだ。

「ヴィクティーンさん！　わたし、ここに来てからほとんど外のこととか聞けずにいたから、詳しいお話伺いたいんですけどっ！　あ、それともお忙しいですか？　そっか……ファーリィンさんにもまだお会いしてらっしゃらないんですよね。え、と、だったら、それがすんでからでいいんですけど、外でのこととか、教えていただでないでしょうか？」

いささか熱をこめすぎたのか、ヴィクティーンは目を丸くした。

だがすぐに穏やかな笑顔となり、そっと目を伏せ、こう答えた。

「わたしなどの知っていることでよろしければ……ファー……いえ、ファーリィンさまも、いまは来客中ということですし……。でも、以前お目にかかったときも思いましたけど、アラクセイトさまは礼儀を重んじる御方なのですね。わたくしなどにそのような丁寧な言葉を用いられることはございませんのに」

謎の言葉だった。

（いえ、わたしから見るとヴィクティーンさんこそ、そこまで畏まる必要ないっていうか、あんまり畏まられると居心地が悪いというか……）

それもこれも、いま現在、この結界の外で流れているらしき噂が原因なのだとしたら、やはりその内容ぐらいは把握しておくべきだろうと思い、アラクセイトは顔面の筋肉に、神経を集中させた。

理想はにっこり、にこやかに。

努力の甲斐なく、半ば引きつった笑みにしかならなかったが、幸いにもヴィクティーンはそのことに気づかないようだった。

先入観、あるいは思い込みというものは、状況次第で善くも悪くも転ぶものなのだと、アラクセイトが学習した瞬間だった。

それから約半刻後——。

アラクセイトは両手で頭を抱える事態に陥っていた。

理由はもちろん、ヴィクティーンから聞かされた話の内容である。
（いったいなにがどうなって……）
こんなことになってしまったのか。
（わ、わからない……）
胸中でつぶやきながら、アラクセイトは必死にこれまで聞いた内容を反芻する。
（えっと……つまり、わたしは初め、放火犯扱いされてて……）
不本意ながら、ここのところは納得できる。
だが、目眩を覚えたのはこのあとだ。
（度重なる放火事件は、悪しき誰かがわたしに冤罪を着せるためにもくろんだもので……）
確かに冤罪といえば冤罪なのだから、そこのところには感謝してもいいかとかは思うわけだが……。
だが、しかしである。
その悪しき企みにいち早く気づいたのが、翠濫のアスカニーリ神殿の最高司祭だった――というのはどう判断したものだろう？
（修行を指導してはいただいたけど、一度だってそれっぽいことは口になさらなかったと記憶

してるんだけど……）

あるいは特殊な守秘義務でも生じたという線は、もちろん否定できないのだけれど。

けれど、どうにも看過できないことがある。

ヴィクティーンが口にした、『準使徒』という役職だ。

どんなに記憶をさらっても、アラクセイトはその単語を記憶のなかから引っ張りだすことができなかった。

実技面では絵に描いたような劣等生だった彼女は、最低限の成績を確保するためもあり、知識的にはそれなりの成績をあげてきていた。

そんな彼女が知らない役職は、まずあり得ない。あったとすれば、その地特有の特別措置によるものか、あるいは非常事態における暫定処置としか思えない。

だとしたら、ヴィクティーンが口にした『準使徒』という言葉は。

（落ち着いて、落ち着いて、落ち着いて……）

自身に必死に言い聞かせながら、アラクセイトは考える。

（知らない内に、そうした新しい立場が確立されたって線も、あり得ないわけではないんだし……）



たとえ、どれほど確率的に低かろうが、ありえないわけではないのだ。
なにしろ、ここ半年近く、自分たちはアスカニーリ神殿との接触をほとんど断ってきたのだから。
(でも、もしそうじゃなかった場合は……)
以前のアラクセイトなら、疑う気にもならなかったことだ。
ソラミイノと違い、彼女は神殿の真摯さを疑ったことなどなかったのだから。
だが、変化は彼女の上にも訪れていた。
(神殿自体が腐敗してしまったのなら……そうでなくとも、もし上層部の誰かが、利得のために信仰や正義より、そちらを選びとる心づもりになっているとしたら……)
それは決して見逃しにできない、深刻な事態だとアラクセイトは思った。
ただ……。
(まだ、足りない。情報が、全然足りない)
もっと、もっと、情報が必要だった。
そうして、それを求める相手は、目下、目の前の女性——ヴィクティーンしかいなかった。
残酷なまでに、それはれっきとした——現実だった。

16

「準使徒という言葉にお聞き覚えはありませんか？」
思い切って正面から尋ねたアラクセイトに、翠泉の主である青年は曖昧に首をかしげ、逆に問い返してきた。
「いや、わたしは初耳だが、君は？」
惚けているのか、本当に知らないのか、これだけのやりとりで判断するのは難しい。
（ああ、ここにミイノかガネルさんがいてくれたらよかったのに――）
到底かなわぬことを思いながら、彼女はかくんと肩を落とした。
「そう……ですか。わたしも聞いたことがなかったから、もしかして翠濫独特の役職かなにかなのかなって思ったんですけど……」
聖石の子供ではなくとも、神々の名づけ児と神殿との縁は深い。

神を名付け親に持つ者は、好むと好まざるとに拘わらず、その属性に強い影響を受ける。アラクセイトの発火能力がいい例であるし、枯れかけた泉を保ちつづけているというファーリィンの不思議な力もそれに当てはまる。

だからこそ、そうした子供たちは、神殿の管理下に置かれるのが常なのだ。

力の使い方を決して間違えぬよう、彼らは必ず神殿に預けられ、この世の理や均衡というものを教えこまれる。

聖石の子供や神官ではなくとも、そうした意味で、ファーリィンはこの街ではかなり神殿の事情に通じているに違いない人物のひとりなのだ。

その彼が――。

(聞いたことないって言うんだから、でっち上げの可能性、高いってことだよね……)

ひとつ確かめて、アラクセイトは躊躇いがちに話を持ちかけることにした。

「あのー、どうも、そのわけのわからない役職に、いつのまにかわたしが就くらしいっていう噂が流れてるみたいなんですけど……」

その言葉に慌てることもなく、しかし憂いを深く刻んだ顔で、ファーリィンはうなずいた。

「らしいですね」

と――。

ヴィーク……いえ、ヴィクティーン嬢から、そのような噂が流れていることは聞きましたが――と言うと、彼は小さく息を吐いた。

「その話を聞いて、わたしからもぜひお伺いしたいと思ったことがあるのですが……アラクセイト。あなたは、もし神殿がそのような特殊な役割を用意することで、あなたに翠濫への永住を望んだ場合、応じるおつもりは……？」

とんでもない、と彼女は即座にかぶりをふった。

「ありません！」

あまりにも意外な言葉に、一瞬頭が真っ白になったほどだ。

「あの、わたしたち、絶対やらなきゃならないことがあって、そのために旅をつづけてるんです。そのことが片づくまでは、どこかに定住するなんて、考えたこともありませんし……それに」

そう、自分には故郷があり、家族がいる。

貧しく冷たい北の大地――それでも、家族がいる限り、いや、温かい思い出が胸を満たしている限り、あの地こそが故郷なのだ。

いつか、かならず帰る場所。

帰った後、またなにか新しい選択をすることはあるかもしれないけれど。

「……故郷が、ありますから」

はにかんでそう告げた瞬間、ファーリィンの双眸に不思議な光が走った。

痛みを堪えるような、それでいてなにかを望まずにはいられないとでも言いたげな……不思議な、それでいて、どこかで見覚えのある光。

(あ、れ……?)

確かに、どこかで見たものだった。

だが、どこで……?

自問したものの、その答えが出る前に、青年が再び口を開いた。

「名誉や権威を振り捨ててでも? この街に留まれば、神殿は恐らく、使徒に準じるだけの待遇を君に与えてくれるでしょう……家族を呼び寄せることも彼らは反対しないでしょう。この街に留まる限り、君はなに不自由なく暮らしていけるはずですよ。それでも……?」

(あ、なんか、意地の悪い聞き方)

とは、直感だった。

どうも、なにがしかの含みがあるらしい——というか、そうとしか考えられない。
だが、それがなにに起因しているのかもわからない状況では、どのように対応するのが正解かもわからない。
アラクセイトが先程思ったように、この場にソラミイノとガネルオージェのふたりが顔を揃えていたら——主に銀髪の少女のほうが——彼女の意を汲み取り、相手の真意を探るべく、駆け引きのひとつやふたつ、仕掛けてくれたに違いないが……いないものはいないのだ。
ならば、拙いながら、自分で乗り出すか、話題を別の方向に逸らすか——しかない。
どちらにするか迷ったあげく、アラクセイトは後者を選択した。
自らが絶対的に、駆け引きのたぐいに関する経験が不足していることを、彼女は把握していたのだ。
「でも、いまは絶対やらなきゃならないことがあるんですもの。貧乏が怖くないなんて、口が裂けても言いませんけどっ！　大事な、大事なことなんです」
そのためにも、ここに留まるわけにはいかない。
「なにがあっても、ここに留まるわけにはいかないんですっっっ！」
叫んだ彼女に、青年は穏やかに「どうしても？」と問うた。

「どうしてもです」
と、彼女は答えた。
そう、どうしても。
彼女にはここに残ることなどできなかった。
彼女には……否、彼女たちには勤めという名の望みがあった。
ワレンアイノという名を持つ者を、再び自由にする、という……。
それはアラクセイトの肉親でも恋人でもない。
けれど、親友のかけがえのない存在なのだ。
そうである以上、彼女はファーリィンの持ち出した言葉にうなずくことはできない。
どうしても、できない。
(なにがなんでも、わたしはソラミイノのお兄さんを取り戻すって、心に誓ったんだもの……たとえ、そのひとが喪月神の憑巫扱いされていたって……)
真摯な思いでアラクセイトはうなずく。
「どうしても、です!」
アラクセイトは叫んだ。

青年は「そうか」と応じた。
そこで片がついたかに見えた事態は、しかし片づきはしなかった。
誤解の生んだ酵母は、ふつふつとさまざまな真実ではない言葉を放つ。
当事者たちの口からではなく、それ以外の者たちのそれから。

なんと、幸せな子供なのだろう。
いくつかの言葉を交わして後、彼が相手に下した判断はそういうものだった。
別段、思い込みを含めて、相手のことを判断しようと思っていたわけではなかった。
ただ、自分の計画外に割り込んできた相手のことだったから、少々邪魔だな、とは思っていたが……それ以上どうにかしようと思ったわけではない。
現在も未来も含め、彼女が危険を招く確率は、どこまでも低かった。
それでも、彼には、我慢ならなかった。
故郷があると平然と言う彼女。

だからそこに戻るのだという彼女。
（なんと憎らしいことを言う相手なのか……）
彼女が悪いわけではない。
彼女は素直に心の内を口にしているだけなのだろうから。
だが、いまだ幼い彼女は、自らの言葉が、ときに相手の心を突き刺す鋭利な刃となることを知らずにいる。そして、その痛みゆえに、相手が自分を憎むこともあり得るのだという事実を。
無垢な……罪深い少女。
（どうしてくれよう）
残酷な興奮を胸に抱きながら、ファーリィンはアラクセイトを見つめた。
早々に退場させるだけのつもりはなくなっていた。
少々痛い目にはあってもらわねば気が済まない。それだけのことを、彼女はしたのだから。
（さて、どんな方法が効果的か……）
思いを巡らす彼の心中には気づく様子もなく、少女はなにやら考えこんでいた。
そうして、ようやく顔をあげたとき、彼女の黄橙色の双眸には不思議な色がたたえられてい

た。

「あの、全然話が変わるんですけど、翠泉の水って、明らかに普通の水とは違いますよね？」

聖石の子供ならではの感覚で、彼女はそのことに気づいたようだった――もっとも、それだけの材料を与えたのはファーリィン自身だったのだが。

白を切ったところで無駄なことは明白だったから、彼は「そうだね」とうなずいた。

翠泉に湧き出る水には、ほかの水とは違う特殊な性質がある。

そこに聖石の子供石を浸した場合、その石に宿る力が水に溶けだし、使徒が作る『薬湯』と似た効果を発揮するのだ。

無論、聖石の子供石で作られた薬湯ほどの効果はない。しかし、準じる効能を持つというだけでも、大変な価値があった。

ひとつには、誰もが聖石の使徒手ずからの薬湯を手に入れられるわけではないこと、また使徒が薬湯を作るには、確実に聖石の子供石が消費されてしまうのに対し、この方法を用いれば、頻度に気を使えば、何度でも繰り返し、同じ石が使えるということだ。

子供石が必要なことに変わりはないが、翠泉の水を使う限りにおいて、かかる費用は格段に安くすむ。

また、使徒があくまで神殿に属する存在であるのに対し、翠泉は……そこに湧き出る水は、翠濫領主――つまりはイヴディーディ家の管轄下にある。

その水をどう利用したところで、神殿から横やりが入れられることはないのだ。

翠泉の特殊性に気づいた神殿は、ずいぶんとその『権利』を我が物にすべく手や口を出してきたという話だが、いまのところ領主側の懐柔――買収とも言えるが――が効いてか、実現はしていない。

そのあたりの事情には、知らぬ顔をしながらも、しっかりと情報を集めてきたファーリィンであるから、少女がなにを言い出すのか、好奇心さえ覚えながら先を促した。

一度芽生えた敵意は消えないが、だからと言って相手への興味が消えるものでもない。

「そうだね。翠泉の水はほかのどんな泉の水とも違う……それで？」

君はなにを聞きたいの？

尋ねた彼の挑発的な態度に気づいたのか、アラクセイトは一瞬困ったような顔になって、それからこう答えた。

「それでって言われても、どう言っていいのかわかりませんけど……あの、そのことって、もしかして、ものすごーく、ものすごーく重大な秘密なんでしょうか？　あ、いえ、ほかに例が

ないってだけで、充分とんでもない秘密だってことはわかってはいるんですけど……その」

一瞬、この少女は頭が軽いのかとさえ思ったファーリィンは、しかし後半の台詞を耳にしたことで、どうやらそうではないらしいと考えを改めた。

そうして、首をかしげる。

では、なぜ彼女はそんなわかりきったことを尋ねるつもりになったのかと思ったのだ。

「アラクセイト……？」

「ええっと、ですね。ヴィクティーンさんが……まだ、わたしたちが領主さまのお屋敷にいるときに会いに来られたんです。で、そのとき、カンラタールの子供たちを喜ばせるような聖石の子供石の持ち合わせはないかって尋ねられて……」

思いもかけぬ名前を聞かされ、ファーリィンは思わず目を瞠った。

「ヴィーク……が……？」

「ええ。答えは保留にしたんですけど、そうこうするうちにあんな騒ぎが起こっちゃって、でもって翠泉の水がとんでもなく特殊だってわかっちゃったものだから混乱しちゃって……ああだめ。まだ整理しきれてない。ちょっとだけ待ってください！」

混乱してます、と顔に書いた少女は、一旦口をつぐみ、「うーん、うーん」と数度唸った。

そうこうして、再び口を開いた彼女の黄橙色の瞳には、深い躊躇いの色があった。

「考えてみたんですけど、ヴィクティーンさんは、ファーリィンさんの負担を少しでも和らげたくて、わたしたちにあんなこと頼んでらしたんじゃないかって思って。でも、翠泉の水の性質のこと考えたら、あまりというか……ほとんど意味はないでしょう？　翠泉に水の属性の聖石の子供石を沈めたところで、その力は水に溶けだすだけで、カンラタールの子供たちを呼び寄せる役には立たないわけですし……」

それとも、少しは役に立つのかしら？

首をかしげる少女の様子に、思わずファーリィンは微笑んだ。

「……まったくの無駄とはならないだろうとは思うけど？」

幼なじみの少女が関係することだからなのか、言葉は自分でも意外に思うほど、するりと出てきた。

少女はぱっと表情を明るくし、ほとんど同時に考えこむ顔になった。

「え、と……でも、だとしたら、水に溶ける力の分を差し引いた場合、どれぐらいの量が必要なのか計算しないといけないわけで……ああ、違う。そうじゃなくて……その、本当にお聞きしたいのは、もうちょっと違うことで……あの」

迷うような素振りを見せた後、少女は思い切ったようにこう問いかけてきた。
「翠泉の水は、昔っからそんな特別なものだったんでしょうか!?　それとも……それとも……」
決死の覚悟と顔に書いているくせに、土壇場で思い切れずにいるらしいアラクセイトに、ファーリィンはあっさりと彼女が本当に『聞きたいこと』を口に乗せ、放り出した。
「昔から、翠泉の水には特別な効能があったという話だよ。もっとも、ここまで奇跡的な力を発揮したのはここしばらくのことだということだがね。ただ、その原因は謎のままだ。湧き出る水量が減ったせいなのか、わたしがここに移り住んだせいなのか……ああ、でもわたしのことは関係ないだろうな。なにしろ、翠泉の水が、ここまで特別になったのは、本当にここ最近のことなんだから」
ここ最近――と、少女がつぶやいた。
その、たき火の炎を思わせる瞳には、胸をざわめかせる、なにか未知の事態を予感させる光が浮かんでいた。
「アラクセイト」
思わず彼は少女の名を口にしていた。

「君はなにを知っている？　そしてなにを隠してるんだ？」

少女はかぶりをふるばかりだった。

「なにも知っちゃいません！　わからないことだらけです！」

叫ぶなり、彼女は席を立ち、凄まじい勢いで部屋から飛び出していった。

彼女に対し、覚えた微かな敵意すら忘れ、ファーリィンは開け放たれたままの扉を見つめていた。

（とんだ、考え違いだったかもしれない）

と、思いながら。

彼女はただの、『予定外の邪魔者』などではないのかもしれない。

現に彼女は、ファーリィンの知らぬなにかに、確かに通じているではないか。

それが自分を囲む状況と無関係である可能性は切り離せないものの、関係があるそれも無視できぬ重さで残っている。

だとしたら、看過していい問題ではなくなる。

自分の――理想とする未来のために。

あの少女は果たして味方なのか敵なのか、それとも、そのどちらでもない者なのか……。

まだ、よくわからない。

17

もはや日常茶飯事となりはててしまったお願いコールに、ソラミイノが慌てることはない。

「はい、はい、はーい！」

叫びながら、声のした方へと走っていく。

「薬師さまーっっ！」

「どうしたの？」

尋ねるまでもない惨状が、彼女の目の前に繰り広げられていた。

安定が悪かったのか、それとも誰かがそうしたのか、ひっくり返った鍋の中身――恐らく熱い熱湯かスープ――を浴びたとおぼしき少女がひとり。

救いがあったのは、それが全身に及んでいないらしきこと。

とはいえ、両足の甲に熱湯――同然のもの――を浴びてしまったのでは、この先の旅程に影

響を受けること間違いなしだ。

（あちゃ）

と思ったソラミイノは、処方に関して少しだけ迷った。

すっかり周囲から頼られるようになった身としては、下手に薬草だの精油だのそれ以外の効能のある油など、簡単に提供できなくなりつつあったからだ。

（両足とも火傷負ったってことは、しばらくは馬車で移動するしかないってことよね。だったら安静は約束されてるわけだから……）

そう決断を下し、彼女は荷物のなかから馬油を取り出した。

「清潔な布を用意して！　できるだけ、たくさん！」

条件が整うなり、彼女はたっぷりの布にたっぷりの馬油をしみこませたものを、少女の足の甲にあてがい、ぐるぐるまきにした。

ラワンデルの精油にも、近しい殺菌、鎮痛効果はあるものの、こちらは用途が多いこともあり、そう大量に使うことはできない。

その点、馬油は火傷の症状に対して覿面の効果を発揮するくせに、ラワンデルほどの使い勝手はないものだから存分に使える利得があったりして――。

（うわー、やだわ、どんどん貧乏薬師の頭になっていってるわ、わたしってば！）

というより、せちがらい損得勘定に走っている、というべきか。

王都潤藍まで、このままでは半月の旅だ。

この大所帯のなかで、唯一の薬師というのはなかなかけっこう大変なことなのだ。

どんなに予防策を用いたところで、出るところには病人もけが人も出る。

そうした全部の症状に合わせるには薬草も精油も不足しているとしか言えず、そうなると切り詰めながら調整していくしかないのだ。

（これって、やっぱり変……変なんだわ……）

これではいけない——そうした意識がソラミイノの胸に生まれかけていた。

これまで彼女は、病や怪我にかかったとき、使徒による薬湯治療を受けるのが最善の策だと信じてきた。

いや、いまでもそれが誤りだとは、どうしても思えない。

けれど、そのことを口にしたときに見せた、巡礼団のみなの反応も忘れられないのだ。

『やつらが、おれたちになにをしてくれるっていうんだ!?』

『あいつらが恵みや奇跡を見せる相手は、金離れのいい金持ちか権力者だけだ！』

衝撃を、受けた。
そんなことはない――そうではない。
そう主張しようとしても、そこに説得力はほとんど皆無なのだ。
確かにそれはそうかもしれなくて――そう感じる部分はあって。
（でも……では、どうしたら、完全ではなくとも平等に近い状態で人々を癒すことができるのかしら……？）
難問だった。
（難しすぎる……難しすぎるわ！）
手に負えないかもしれないと、ソラミイノがそう考えたときのことだった。
「きゃあああぁぁっ！」
絹を切り裂くような悲鳴が聞こえた。
「どうしたの!?　いったいなにが……!?」
叫んだはずの言葉が音にならない。
否、その瞬間、彼女は空間ごと『何者か』によって隔離されていた。
（これはなに!?　これはいったい……!?）

どういうことなのか――。

ただ、理屈ではない危機感だけが、ひしひしと肌を突き刺してくる。

(怖い……危険……危険……っっ！)

そう、危険！

「な、に……」

呆然とつぶやいたソラミイノの目の前に、そのひとが現れたのは次の瞬間だった。

その髪は銀――。

その双眸もまた、同じ色――。

銀髪銀瞳の少年を前に、言葉をなくしたソラミイノの前で、彼は軽やかな笑みをたたえ、そうしてこう告げたのだ。

「やあ、ソーラ。迎えにきたよ」

と――。

不穏な空気を纏いながら、黒髪の青年がひとり、旅路を急いでいた。
乾燥から喉を守るために、木綿を幾重にか折り畳んだもので口元を塞いでいるが、もしそれがなかったら、その口元がへの字になっているのが見えたろう。
いや、彼の双眸に宿る剣呑な光を目にすれば、彼がこの上なく不機嫌であることは、明らかすぎることだった。
そんな彼がぶつぶつと独り言をつぶやくさまは、はっきり言って不審者そのものである。これが街中であったなら、警邏の者に声をかけられたかもしれない。
幸い、そこは街中ではなく、また彼の周囲にはひとがいるわけでもなかったから、そうした心配は不要ではあったのだが……いや、だからこそ彼のぶつぶつは、いつまでたっても止まないとも言えるのだが。
「まったく、あいつらはおれのことをなんだと思ってるんだ!?　都合よくこき使える下僕かなにかと誤解してるんじゃないだろうな」
当事者ふたりが耳にしたら、まったく逆の理由で嘆くに違いない言葉を口にし、青年――ガネルオージェは乱暴に黒髪をかき乱した。
右の肩には、潤藍まで充分もつだけの食料と薬草の入った袋がかかっている。左手には、砂

金を散らしたような緑の丸い石三粒を鈴なりにした根付のようなものが握られている。

揺れてぶつかり、音をたてるのが普通だが、なぜかその石は動かず、音もたてない。

見るものがいれば、その不思議に首をかしげたことだろう……が、前述した通り、彼のそばには誰もおらず、だから興味を抱く者もいなかった。

ソラミイノから遅れること三日、翠濫を出立したガネルオージェだが、いまだ求める集団を見つけることはできずにいる。それも致し方のないことで、彼はまだ、足となる馬を入手できていなかったのだ。

翠濫で目立つのは禁物だったため、安くはない買い物をしてひとの記憶に残る危険は冒せなかったせいだ。

ほかのふたりと違い、神殿から身を隠す必要のない彼は、師匠たちからもらった子供石を売却することで、手っとり早く資金を調達できるという利点を持っていた。

もっと簡単なのは、自分の子供石を処分することなのだが、これは師匠たちに厳しく禁じられており、破門されたいまも、言いつけを破る気にはなれずにいた。

師匠たちを心から慕っているから——ではなく、禁じるにあたり、師匠の片割れである青玉の使徒が、笑顔でたっぷりと脅しをかけてくれたからである。

『いいですか、きみは自分がどんな珍獣よりも珍しい存在であることを忘れてはいけませんよ。何といっても、世界に現在ただひとりの突然変異なんですからね』

言うに事欠いて、珍獣とは……突然変異とは何事かと思ったが、口では到底かなわぬことを当時すでに骨の髄まで思い知らされていたのと、口答えした後、師匠の片割れが気がすむまで厭味の嵐を見舞ってくれるのを学習した結果、彼はそのことに触れることは差し控えた。

とはいえ、完全なる沈黙を守ったわけではない。

『珍しいとおっしゃるのであれば、おふたりも相当珍しい方々だと記憶してますが……？』

確かに金剛石の子供は、自分ひとりしかいないという話だが、師匠たちもひとのことをどうこう言える立場にはないはずだった。

片や紅玉の使徒、片や青玉の使徒である。

『ああ、そうですね。ですが、ちらほら、鋼玉の子供も生まれてるみたいですし……それに、ほら、わたしたちはもう、れっきとした使徒ですし』

れっきとした、という部分をことさらに強調されたと思ったのは、恐らく気のせいではない。

温和そうに見える外見と口調の主であるこの青年は、しかしけっこうな毒舌の主なのだ。

『使徒でも油断はできないと、先日伺ったような気がするのですが……』

微かにこめた皮肉の毒に、しかし全身毒だらけの青年は動じない。

『ええ、ですから、油断もしない使徒ですから、という意味ですよ。そこのあたりのことは、きちんと正確に認識してくださいね』

……とまあ、そうしたやりとりの後、親切ごかしに彼が説明してくれた内容が、あまりにも恐ろしいものだったので、彼の記憶に深く刻みこまれたのだ。

『神殿関係者だからって、頭から信じるなんて愚を犯したら、まず間違いなく、君の人生、真っ暗闇ですからね』

自らも立派にその一員のくせに、そんなことを平然と言うのだ。

『自分の足場固めの役に立つとなったら、あのひとたちは平気でひとのこと駒扱いしてくれますからね。殊に君のように使徒に選ばれてもいない子供なら、あらゆる手段を用いてでも、君を取りこみ、利用しようとするでしょう。まあ、有力者の方々のなかには、つきあい方を間違えない限り、こちらにも利点があるのは確かですが……まだ、君には難しいでしょうしねえ……そうしたことを考えると、やはり、君は極力神殿とはお近づきにならないほうがいいと思いますよ』

犯してもいない罪を捏造されたあげくにこき使われたり、大事なひとを人質に取られたあげくにこき使われたり、その結果、少しでも反抗的な態度をとったというだけで、薬づけにされるのはさすがに遠慮したいでしょう？

あまりにもにこやかに告げられたものだから、ガネルオージェは一瞬言葉の内容が理解できなかったほどだ。

それでも、確かにそのような目にはあいたくなかったので、自分の秘密に係わる部分で、神殿に近づこうとは思わなかった。

ちなみに、ひとつ素朴な疑問を覚えた彼が、もうひとりの師匠に質問したのは後日のこと。

『つきあい方次第でつきあえるひともいるって、つまり、神殿にも信用してもいい高潔な人物はいるということなんでしょうか？　ただ、見極めるのが難しいから、師匠はあんなことをおっしゃったんでしょうか？』

人間としては、ごくごく正しい質問だったはずなのだが、紅玉の使徒である青年はかぶりをふった。

『確かに善良で高潔な人物もいないわけではないが、誼を通じて得になるような連中のなかにはまずいないな』

片割れがあまりにも毒――舌――人間なので、つい残るほうはまともそうに勘違いしがちなのだが、この台詞を聞けば、決してその範疇に入る人間でないことは明白だった。

そこで止めればいいものを、ガネルオージェは要らぬ好奇心を抑えきれず、『それはどういう意味なのでしょう?』と問いかけてしまった。

師匠の片割れは、やはり青玉の使徒と長年コンビを組んできただけはある人物だった。

『あいつが言ったろう? 神殿がやりそうなことは? つまりあっちにもそれは有効だってことだな』

つまり、弱みを握れば――ということだ。

聞かなければよかった……と思いながら、それでも若いガネルオージェは更なる好奇心に抗えず、ついつい問いを重ねてしまった。

『もし……取り引きできるような弱みを相手が持たなかった場合は……?』

この数瞬後、ガネルオージェは本気で聞くのではなかったと後悔した。

なぜなら、さしたる感慨もない様子で、紅玉の使徒はあっさりとこう答えてくれたからだ。

『さて……確か、楽しい思い出を作ってあげたとかなんとか、一度嬉しそうに言っていたのを聞いた覚えがあるが……』

師匠たちの過去に触れるのは危険だと、心底感じた出来事だった。
以降、彼はなるべく好奇心には蓋をするように努めることとなった。
言うではないか、好奇心は猫を殺す、と。
ガネルオージェは猫にはなりたくなかったのだ。
……と。

あまり幸福でもない思い出に浸っていたガネルオージェの意識を、現実に引き戻す出来事が起こったのはその刹那のことだった。
カチャン、と砂金水晶が音をたてたのだ。
(近くに……いる!?)
この石が音をたてるということは、そのはずだ。
だが、あり得ない。
三日遅れの距離は、この程度で埋めきれるものではないはずだ。なにより、イェルネージェが紹介したという巡礼団の影すらまだ、確認できないではないか。
だとしたら……いったい、それはどういうことなのだろう。
(別行動を取った？　その必要があって……？)

あるいは。

（別行動を取らされた――？）

自らの意志ではなく……他者によって、無理やり。

どちらとも知れない。

だからこそ、それを確かめねばならないとガネルオージェは思った。

誰に対してか――決まっている、ソラミイノ本人に、だ。

食い入るように見つめる彼の視線に応えるかのように、再び砂金水晶が震え、ぶつかり、音をたてた。

カチン、と。

硬質で澄んだ、高音のその響きは、まるで少女の悲鳴のように、彼の耳に響いた――。

アリンスール家の風変わりな令嬢として、ヴィクティーンのことを知らぬ者は翠濫にはいなかった。

アリンスール家とは、貴族ではないものの、翠濫の経済を支える屋台骨のひとつに数えられる権門の名。

三年前に起こった騒ぎで飛び出した流言飛語の影響で、翠濫における力は弱まったものの、彼黄全土に影響力を発揮するその力はいまだ無視できかねるものとして、街全体が認めているのだ。

その富豪の令嬢であるヴィクティーンは、三年前の事件以降、翠泉に引きこもった『カンラタールの息子』ファーリィンの世話を自らするために、足しげく翠泉に通うようになった。

せめてもの罪滅ぼしのつもりなのだろうと言う者もいれば、違う、彼女は傷ついた幼なじみの心を慰めるために献身しているのだ、と言う者もいる。

ヴィクティーンはしかし、沈黙したままだ。

否定はできない——真実に背くことになってしまうから。

肯定もできない——かばってくれた、かけがえのないふたりの誠意を無にしてしまう行為だから。

だから、ずっと、彼女は祈り、願うことしかできずにいた。

大切で大切で、かけがえのないふたりの兄弟——。

あの二人が、どうか幸せになりますように――と。
希望は一度潰え、新たなそれがようやく見つかった。
（今度こそ……）
どうか、どうか、今度こそは、この願いがかなうように――。
心からの祈りをこめて、彼女は目を閉じる。
その日――否、その夜も、彼女は深い祈りを神々に捧げていた。
だから、外に面した窓をたたく音に気づいたのは、けっこう時間が経ってからのことだったと思う。
覆い布の向こうから聞こえてくる、窓を叩く音に緊張したヴィクティーンは、しかししばしの沈黙の後、耳を打った声に、大きく目を瞠った。
「……ヴァディ……？　ヴァディなの……？」
問いかけた彼女の耳に、懐かしい幼なじみの声が響いた。
「覚えてくれていたんだ……そうだよ、ヴィーク、ぼくだ」
その肯定に、ヴィクティーンの精神は恐慌状態に陥りかけた。
（なぜ……なぜ、こんなときに!?　なにもかもが、もしかしたらうまく運ぶかもしれないい

ま、なぜ、彼が……!?)

帰れ、あるいは戻れと命じるのが、一番正しい道なのかもしれない――とは思った。

けれど、ヴィクティーンには、それはできなかった。

「なぜ……」

つぶやきながら、彼女は窓へと近づいた。

「なぜ、戻ってきたの?」

窓を開く。

まだ冷たい夜風が、室内に吹き込んできた。

その風に乗せるかのように、忍び込んできた青年は笑った。

「きみとあのひとを呪縛から解放するために……」

そうして、と彼は言を継いだ。

「みんなで……三人で、幸せになるために」

その言葉に、ヴィクティーンは打ちのめされた。

なによりそのことを願っていたからこそ、彼女は泣くこともできないほどの衝動に襲われ、唇を噛みしめることしかできなかったのだ。

「なにを、すれば……いいの？」

混乱から抜け出し、ようやくそう問いかけたヴィクティーンに、幼なじみは二粒の石を手渡した。

あとがき

この本が発売されるころ、東京はちょうど桜の開花時期……今年こそは優雅に花見に行きたいなあ、などと夢を馳せつつこのあとがきを書いております。

まず最初にお詫びしなければならないことがあります。

聖石の使徒本編第四作目にあたります『其は水に遊ぶ者』ですが……またしても終わっておりません。続いてしまいました。

当初の予定では、今回きっちり完結し（あ、『其は水に……』がです）、さらには短いお師匠さまたちの番外編など入れられたらいいなあ、などと勝手に思っていたわけですが……いつまでも未熟な作家前田は、またしても原稿枚数を読み違い、予定は未定の事態を引き起こしてしまったのであります。

毎度のことながら、恥ずかしい限りです。しっかりストーリー展開とか、ノートに書いてた

りするんですが……やはり、書いてる途中で「あ、こうしたら面白そう♡」とか思うたびに、修正を重ねるのが原因でしょうか……。

おかげで設定当時に比べ、可愛くなったひと若干名、謎めいてきたひと約一名、性格に捻りが加わり、なんだか怖いのか素敵なのかわからなくなりつつあるひと約一名とゆー。

恐ろしくも美しい方が、なぜかひとりの少女に執着気味になったのは、まあ宿主の影響と言えなくもないから理解できるものの、E難度なみに複雑怪奇な性格の方が増えていくのはなぜでしょうか。

……謎です。

しかし、いまふと気づいたことですが、ガネルオージェ君はことあるごとにお師匠さまたちのことを思い出しているというのに、アラクセイトとソラミイノは家出して以来、全然思い出してません。

少女ふたり、実は薄情者なのか!? それともつきあった時間が（ガネル君とお師匠さまたちほど）長くないため、ことあるごとに思い出すほどでもないとか？ いや、でも考えてみると、ガネルオージェ君の思い出って、必ずしも美しいものではないので（愉快ではありますが……本人聞いたら湯気出して怒りそうだな）、幸いなのかも……。

完結してない話の内幕を書くのもどうも無粋なので、そろそろ話を変えることにして……とその前に。

次巻でこそ、必ず『其は水に……』は完結させます。

どうか、寛大な心で、次巻をお待ちください。

で、近況です。

いや、近況ってよべるかどうか、かなり不安なんですけど。

ずばり、湯豆腐に凝ってます。

鰹だしにしたり、昆布だしにしたり、具も椎茸入れたり白菜入れたり、白身魚入れたり、魚のすり身入れたりとか。

で、これはもうあまり珍しい食べ方じゃなくなったかもしれませんが、お勧めするのは『温泉湯豆腐』。これはわたしの生まれ故郷九州は佐賀県の某温泉町で始められたという湯豆腐なんですが、簡略化したやつですから、別にその温泉が必要というわけではありません。

必要なのは木綿豆腐と重曹。あとは水だけです。

適当に重曹を水にとかして鍋に入れ、豆腐を入れて火にかけるだけ（重曹の入れすぎには注意しましょう。なぜなら豆腐が全部溶けてしまうから）。熱が通るうちに、水は豆乳さながら

に白くなり、豆腐の表面は溶けだし、とろとろになります。
それをすくって湯豆腐のタレにつけて食べれば、とろんとろんの食感が。
おや、なんだか料理のレシピっぽい内容に……（湯豆腐で大げさか）。
まあ、興味を覚えた方はお試しください。ちなみに絹豆腐は溶けすぎる危険があるのでお勧めできません。薬味に凝っても楽しいです。わたしのお勧めはわけぎとすり生姜と鰹節と刻みミョウガでしょうか。
はっ、食欲に支配されて、一ページ近くを費やしてしまった！
そろそろ結びとまいりましょう。
担当の永田さま。
今度もご迷惑をおかけすることとなり、お詫びのしようもありません。次作こそはこのようなことのないよう、精進いたしますので、どうかよろしくお願いいたします。
山本鳥尾さま。
前回に引き続き、またしてもとんでもないスケジュールとなり、申し訳ありません。美しいカバーや挿絵に、いつも感謝しております。これからもどうか、おつきあいください。
最後に、読んでくださる方々――。

頼りがいのある師匠たち（×2）から巣立ったばかりの三人は、まだまだ頼りなく、ばたばた足掻くことも多いですが、あたたかい心で見守っていただけたら、と思います。

それでは次は『其は水に……Ⅲ』か『鬱金の暁闇3』にて――。

平成十五年　三月某日

前田　珠子

追記……ガネルオージェ君のお師匠の片割れのお笑い初恋ネタを、以前書いたまま忘れてたのを今回偶然発見しましたので、この後に掲載します。ただし、微妙な設定等、現在は変更が加えられておりますから、くれぐれもそのあたりにはご注意ください。悪しからず。

トリノアークには夢があった。

それは、年頃の少年らしく、やさしく可愛い少女と恋をすること。それが真実の恋だと確信できたら、もちろん結婚を申しこみ、一生ずっと一緒に暮らすのだ。

問題があるとすれば、それは彼の審美眼にあるのだが、彼自身はそのことにまったくといっていいほど気づいていない。

「とりたてて美人じゃなくてもいいんだ。人間ってのは結局中身が大事なんだしさ」

十代の半ばに過ぎぬ少年としては、かなり枯れ……いやいや、達観した台詞だが、周囲の人間たちは、この言葉の意味を知っているだけに天を仰ぐ。

別段、彼の審美眼が、他者とかけ離れたものというわけではない。

ほとんど別次元のものとしか思えないほどに、彼が美人と認める水準が高いだけのことだ。

彼に言わせれば、周囲が認める美人など、その範疇に入らない『十人並み』にすぎないのだ。周囲から『震えがくるような』とか『まぶしいくらい』とか評される美人でも、彼に言わせれば『まあまあ美人』でしかないのである。

そんな彼が正真正銘の美人と認めるような存在が、はたしてこの世に存在するものかどうか——周囲は常々疑問を抱いている。

そんな彼の言うことだから、前述の台詞にしても、あまりというか、ほとんど説得力はない。

しかも、そう言いながらも、やはり少年らしい正直さで「ま、気立てもよくて綺麗だったらもちろんそのほうが嬉しいけど」などと付け加えた日には、誰もが彼のこの夢が、実現不可能なものだと認識してしまうのも無理はないだろう。

さて、そんなある日、彼は師匠である黄玉の使徒に呼び出された。

彼の抱いて生まれてきた聖石は鋼玉の一種で、それはこれまで一度も確認されたことのないものだったから、生まれると同時に神殿に引き取られ、ずっと教育を受けてきたのだ。

しかし、稀有な石を抱いて生まれたということで、周囲が寄せる期待のほとんどを、彼は裏切っていた。

世界を破滅に導きかねない瘴気を感じ取ることが、どうしても彼にはできないのだ。幼いころは、それでも一所懸命努力したのだが、それでも芽がでないとあって、彼は早々に方向転換した。

どうせ使徒にはなれそうにないんだったら、使徒を守る護衛官になってやる――というのがそれだった。

幸い、彼は身体的にも恵まれており、力も強く、筋も悪くなかった。

護衛官たちの暮らす一郭に、彼は頻繁に出入りし、腕を磨きつづけた結果、いつその任に就いてもおかしくないだけの力量を身につけた。

使徒である師匠には、変わらず学んではいたが、一向に成果がでない修行には、いいかげん辟易しており、「あきらめてくれないかなー」などと、実はこっそり考えていたりした。

ので。

その日、呼び出しを受けたとき、トリノアークはひそかに期待していたのだ。

(やっと物分かりの悪い上の連中も、観念してくれたかな)

と――胸はずませて、彼は呼び出された神殿の中庭へと急いだ。

なぜに中庭、と思わなくもなかったが、楽観的予測で浮かれていた彼は、あまり深くは考え

なかった。

この能天気さは、後になっても改められることもなかったことから、それは彼の本質の一部だと見なされるようになった。

事実、彼はある意味、確かにそうなのだ。

さて、そうして呼び出された場所へ足を運んだトリノアークは、そこで、師匠の隣にたたずむ人影に気づき——次の瞬間、矢車菊色の双眸を大きく瞠った。

白日夢としか思えぬ存在が、そこにはいたのだ。

背の半ばまでも届きそうな、やわらかそうでしなやかな黒髪、象牙……否、真珠のような白い肌、通った鼻梁、薄すぎず厚すぎずもせぬ形のいいバラ色の唇——。

（理想だ）

と、彼は思った。

理想の化身が目の前に現れた、と。

惜しむらくは、黒い睫毛に縁取られた双眸が閉ざされていることだったが、そんなものは気にならなかった。

（なんて綺麗な娘なんだろう……）

ぼーっとなって見とれながら、それでも彼は完全に理性を失していたわけではなかった。ものだから、こう考えたわけである。

(見たことないけど……使徒に選ばれたばかりの娘なのかな？　もしかして、年が近いってこともあって、おれが護衛のひとりに選ばれたとか……？)

楽天的な性格の彼は、希望的観測を得意としていた。

さらに、これは彼の若さから生じるものであったが、思ったことをすぐ口にする悪癖も少々あった。

「……こんな綺麗な娘、本当にいるとは想像もしてませんでしたよ、師……」

匠――と言い終える間もなくのことだった。

黒髪の美少女が霞のように消えたかと思うと、次の瞬間、足に強い衝撃を受け、不覚にもしりもちをついてしまった。

「へ？」

なにが起きたか理解できず、のろのろと顔をあげた彼に、冷やかこの上ない声がかけられた。

「動くな」

喉元に、ひやりとするものがつきつけられていた。
いったい誰が、と……そろそろと視線だけを動かし、その声の正体を見極めようとしたトリノアークは、あまりのことに硬直した。
襲撃者は、あろうことかなろうことか、自分が見とれたあの美少女だったのだ！
「……へ？」
間の抜けた声を、再びあげた彼の頭上から、実に嬉しそうな、愉快そうな、師匠の笑い声が降ってきたのは次の刹那のこと――。
「井の中の蛙大海を知らず……とは、まさにこのことだな」
嵌められたのだと気づいたのは、まさにその時だった。
師匠を含め、神殿の上層部は誰ひとりとして、自分を護衛官にするつもりなどないのだと、いやでも認めざるを得なかった。
だが、それ以上に、トリノアークの心を奮い立たせたのは、あの黒髪の美少女の存在だった。
あれほど儚げで美しい、夢の化身のような姿をして……そのくせ瞼を閉じたままで一瞬で自分の命を刈り取った、少女。

夢のように美しく、死に神のように恐ろしい――。

あの少女に勝ちたい、とトリノアークは強く、強く思った。

そうして彼女を守れるだけの力があるのだと認めさせたら、彼女とずっと一緒に過ごすのだ――彼女を守りながら。

彼の最大の夢は、大幅に変質していた。やさしいだとか気立てがいい――という条件は、彼のなかからすっかり払拭されてしまった。

その敗北以降、彼が剣技のみならず、師匠についての修行にも身を入れたことは言うまでもない。全身全霊をかけて守りたいと思う存在を得た彼は、どこまでも貪欲に自らの能力開発に取り組んだ。

一年が過ぎ、二年が過ぎ……五年がたつころには、あの少女との間に生じたであろう体力差ゆえに、もはや望んだ勝負などつけようにもつけられなくなった事実に落ち込みを覚えたりもしたものだけれど。

さらに、感知能力のなさゆえに、決して使徒に選ばれることはないだろう――そう信じていた世界が、なぜか彼を使徒に選んだということで、トリノアークは新たな目標を必死に探した。

それが、ふたつめの夢――世界最強の剣士になること、だった。
いつか、あの幼い日、自分をあっさりと打ちのめした少女に勝ったと信じられるようになるには、そこまで極めるしかない、と信じたのだ。
彼女が消えたりしなければ、はりついてでも一緒にいたいと、そして超えたいと思ったのだけれど。
現実として、彼女はいない。師匠も決してその行方を教えてくれないのでは話にならない。
（夢のようだけど、決して夢じゃない……夢なんかじゃなかった……）
あの一瞬。
思い出だけを胸に秘め、生きていけるほど世間を達観できていない自覚のある青年は、思い切り人生を楽しみつつ、尚且つ思い出も大事に抱えて生きていこうと、そう思った。
その美しくも高潔な決意は、その四半刻後、あっさりと打ち破られることとなった。
神殿上層部が勝手に選んだという相棒に対して、トリノアークはかけらも期待していなかった。言い方は悪いが、「邪魔にならない程度なら許す」といったものだった。
だが、しかし。
その『相棒』と紹介された青年を目にした瞬間、彼の悪癖は復活を果たした。

種類は違うものの、同じ鋼玉の使徒として選ばれたのだと、師匠と第一司祭から紹介された相手といえば――。

「別嬪（べっぴん）――」

としか言いようのない相手だったりしたのだ。

次の瞬間、殺気を覚え、咄嗟（とっさ）に彼は腰の剣を抜き、相手の攻撃を受け止めた。

細身の体のどこに、これほどの力が――と思わずにはいられぬ攻撃だった。

「な、なにしやがるんだ!?」

叫んだ彼に、相手は鳩（はと）の血色の瞳を細め、こう答えた。

「なるほど、確かに腕は上がったようですね」

と。

相棒となる青年はナウルニールと名乗（なの）った。

ふたりの鋼玉の使徒たちは、こうしてともに行動することとなった。

紅玉（こうぎょく）の使徒トリノアークが、自分の相棒となった青玉（せいぎょく）の使徒ナウルニールと、初恋の少女との間に関連性を見いだしたのは、そのしばらく後のことであり……結局、その事実確認をする勇気に恵まれることはなかった。

両者にとって幸いなことと、言えたかもしれない。

この作品のご感想をお寄せください。

前田珠子先生へのお手紙のあて先

〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10
集英社コバルト編集部　気付
前田珠子先生

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、最近では実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



聖石の使徒
其は水に遊ぶ者Ⅱ

COBALT-SERIES

2003年4月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　谷山尚義
発行所　株式会社 集英社

〒101—8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230)6268(編集)
電話　東京(3230)6393(販売)
(3230)6080(制作)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2003　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社制作部宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN4-08-600249-3 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

前田珠子 〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒

其は焔をまとう者

聖石の使徒

其は力を放つ者

聖石の使徒

其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒

其は水に遊ぶ者Ⅰ



〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／廈門 潤



漆黒の魔性

白焔の罠

柘榴の影

紫紺の糸（前編）（後編）

翡翠の夢1～5

鬱金の暁闇1・2

女妖の街 破妖の剣 外伝①

ささやきの行方 破妖の剣 外伝②

忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③

時の螺旋 破妖の剣 外伝④

魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤

呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

コミック版 好評発売中

破妖刀・紅蓮姫を操る剣士ラスの
愛と闘い…大人気ファンタジー！

前田珠子/厦門 潤

破妖の剣
廃性降臨
白い焔に包まれて消えた街——その原因を探るラスと少年ザハトだったが!?



破妖の剣
紅の魔剣
碧の魔胎
最愛の使い手を失い暴走する紅蓮姫…。ラスと出逢う前の紅蓮姫の哀しい物語。



破妖の剣
深紫絃韻 1 2
魅縛師リーヴィの里帰りに同行したラスは、思いがけないピンチにおちいるが…!?

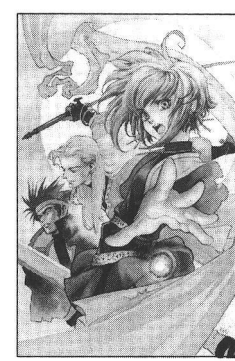


〈好評発売中〉 コバルト文庫

とびきり有能な人材、提供します。

イズァーカ商会へようこそ

前田珠子
イラスト／鈴木理華



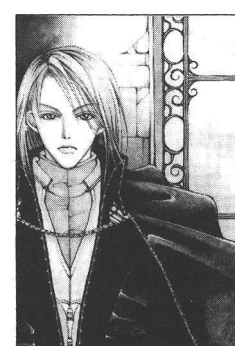
イズァーカ商会はどんな厄介事も引き受ける、世界最大にして唯一の人材派遣会社。特殊護衛課のカリンたちのもとには今日も物騒な依頼が舞い込んできて!?トラブルコメディ！

〈好評発売中〉 コバルト文庫

約束の庭でほほえむ、美しい妖魔。
華麗なる王国の幻想ファンタジー！

タラスタロスの庭

前田珠子
イラスト／木々



狂王カァスタイーンは残虐な殺戮の末、遂に広大な国タラスタロスを平定した。だがその裏には、選ばれし者にしか見えない、空中に浮遊する庭で会った妖魔との約束があった…。

〈好評発売中〉 コバルト文庫

新宿に吸血鬼出現？私が巫女体質？
ファンタジック学園コメディ！

女神さまのお気の向くまま1～3

前田珠子

イラスト／辻 よしみ



異界から侵入してくる怪物から「こちら側」の世界を守っているふたりの女神さま。そのひとり・嫦娥の依巫となってしまった高校生・桜子は超多忙、大迷惑な毎日を過ごしていて!?

〈好評発売中〉 コバルト文庫

美しく切ない叙情ファンタジー

前田珠子 〈月下廃園〉シリーズ

イラスト／江ノ本瞳

月下廃園

月華の国の王子で、風の愛し児トゥミャーンは、王宮の庭園で出会った美しい人物が忘れられず…。

月下廃園2

ある想いから、自らを月華の王宮の庭園に呪縛しているセジュン。そんな彼を慕うトゥミャーンだが。

月下廃園3

トゥミャーンは光明神殿の使者として、セジュンが消えた月華に3年ぶりに戻ったが!?



〈好評発売中〉 コバルト文庫

目覚めよ、永遠楽土を守る聖獣たち！

前田珠子 〈聖獣〉シリーズ

イラスト／おおや和美

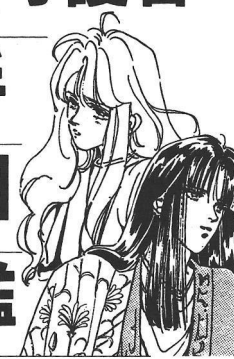
まどろみの守護者
聖獣復活譚 前

銀の守り手
聖獣復活譚 後

目覚める日
聖獣覚醒秘譚 第一部

深き闇の檻
聖獣覚醒秘譚 第二部

昏き夜の果て(上)(中)
聖獣覚醒秘譚 第三部



〈好評発売中〉 コバルト文庫

憧れは殺意へ、そして転落へ――。

赤の神紋 第八章

―Blue Ray Arrow―

桑原水菜
イラスト／藤井咲耶



監禁した榛原に絶望の淵に落とされた響生。一方、衝撃的な過去に苦しみ、自分の存在に罪意識を持つケイ。傷つきながら二人は…。

〈赤の神紋〉シリーズ・好評既刊

- 赤の神紋
- 赤の神紋 第二章 -Heavenward Ladder-
- 赤の神紋 第三章 -Through the Thorn Gate-
- 赤の神紋 第四章 -Your Boundless Road-
- 赤の神紋 第五章 -Scarlet and Black-
- 赤の神紋 第六章 -Scarlet and Black Ⅱ-
- ファイアフライ『赤の神紋』
- 赤の神紋 第七章 -Dark Angel Appearance-

〈好評発売中〉 コバルト文庫

謎の少年&少女の目的とは…!?

レヴィローズの指輪

エルカーヴァの種

高遠砂夜

イラスト／起家一子



誰でも魔術師になれる…怪しいメッセージ付きで届けられた木の実みたいな種。食べてしまったジャスティーンとダリィの運命は!?

〈レヴィローズの指輪〉シリーズ・好評既刊

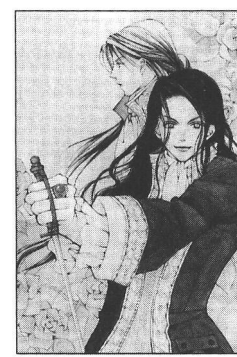
レヴィローズの指輪
ジェリーブルーの宝玉
闇の中の眠り姫
幽霊屋敷と風の宝玉
シャンレインの石
ルファーヌ家の秘密
グレデュースの鎖
紅の封印

〈好評発売中〉 コバルト文庫

美しいものには牙がある!?
"薔薇の騎士"の甘く危険な素顔!

薔薇の接吻（くちづけ）
～レマイユの吸血鬼～

真堂 樹
イラスト／木々



殺人事件の犯人は吸血鬼…。第二王子ジェラールはエヴァンタイユ宮の不穏な噂を調べ、レマイユ家へ。吸血鬼退治の流れを汲む屋敷の主は、裏の顔をもつ妖艶な美青年だった！

〈好評発売中〉 コバルト文庫

「森」が君の体を欲しがってるんだ…。

聖霊狩り

贖罪の山羊

瀬川貴次

イラスト／星野和夏子



早紀子が失踪した！桜田家へ乗り込む柊一だが、入らずの森に留まった誠志郎にも刺客の手が…。桜田家の陰謀が本格的に動き出す！

〈聖霊狩り〉シリーズ・好評既刊

聖霊狩り

聖霊狩り 夜を遣うもの

聖霊狩り さまよう屍

聖霊狩り 天使のささやき

聖霊狩り 惑いし子ら

〈好評発売中〉 コバルト文庫

あたしの過去を奪った6本指の悪魔。

ワイルド・カード

追憶の異邦人

佐藤ちあき

イラスト／伊沢嘉仁



過去から逃れて暮らすアシュレイ&キーフに復讐の炎をたぎらす女が迫る！ 複雑な過去の因縁をめぐり、華麗な宴の席で事件が勃発！

〈ワイルド・カード〉シリーズ・好評既刊

ワイルド・カード

憂鬱な怪盗たち

〈好評発売中〉 コバルト文庫

自由のために戦う傭兵の心のルーツ

落花流水

竜の眠る海

金蓮花
イラスト／珠黎皐夕



世界で最も自由な魂を持つという、暁の傭兵ジェイ。その誇り高い生き方の陰にあるものは…。雄大につづる大陸冒険ファンタジー。

〈竜の眠る海〉シリーズ・好評既刊

- 竜の眠る海
- 剣の末裔
- 黄昏の伶人
- 虚飾の檻 前編・中編・後編・完結編
- 精霊の女王
- 夏至祭
- 誓言

コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」

募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!

〈大賞入選作〉
正賞の楯と副賞100万円(税込)

〈佳作入選作〉
正賞の楯と副賞50万円(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
【締切】 毎年7月10日（当日消印有効）
【応募資格】 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt12月号誌上（および12月刊の文庫のチラシ誌上）。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞・読者大賞」（大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円）の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
【締切】 毎年1月10日（当日消印有効）
【応募資格】 男女・年齢・プロ・アマを問いません。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt8月号誌上（および8月刊の文庫のチラシ誌上）。大賞入選作はコバルト文庫で出版（その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします）。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係

★応募に関するくわしい要項は隔月刊誌Cobalt（1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売）をごらんください。

9784086002493

ISBN4-08-600249-3

C0193 ¥419E

1920193004199

定価本体419円十税



コバルト文庫